石井勲の漢字教室

２　漢字による才能開発



Ⅱ　三歳からの漢字教育

第一章　まず漢字に親しませよう

Ⅰ　幼児と漢字

こんなに覚えやすい文字はほかにない

幼児への漢字教育に対する最大の非難は、「まだかなも読めない幼児に漢字とは乱暴すぎる」という論です。しかしこれは、漢字というものはむずかしいもの、子どもにはわからないもの、という固定した考えから出ているのです。

ところがわたしは、実験をとおして、幼児は、かなよりも漢字のほうをよく覚えることを確かめております。三歳の子に漢字を読めるようにすることは、六歳の子にかなを読めるようにするよりもやさしいのです。

世界のいろいろな文字のうちで、幼児にとって、漢字ほどやさしく 覚えられる文字は、ほかにはないように思われます。なぜそうなのかな、あとで述べますが、とにかく、最近の実験で、最も容易に漢

字を覚える時期は、三～四歳のころであることがわかりました。つまり、漢字教育をしている各幼稚園からの報告は、いずれも「四歳児の方が　五歳児よりも抵抗なく漢字を吸収する」と記録しております。

記憶の仕方には、論理的な記憶の仕方と機械的な記憶の仕方があって、機械的な記憶は、三～四歳の幼児期が最高で、この時期を過ぎると、あとは衰える一方だと言われますが、言葉や文字は、論理的な記憶よりも主として機械的な記憶によっているので、ことに日常よく使われる言葉や文字は、幼児期に環境から自然と吸収させるように配慮するのが、いちばんいい方法なのです。

教えるのではなく自然に覚える

それにしても、そんな小さい子どもに漢字を教えることは、早過ぎて害があるのではないかという声も聞きます。たしかに、いやがる子どもに無理に詰め込むのでしたら、害もありましょうし、なによりもまず、子どもが受けつけますまい。けれども、幼児は本来、与えられたすべての環境を栄養として育つのです。それは、自然から与えられた生命力――「内なる力」の働きです。この育つ力に呼びかけ、そしてその育つ力が応じるのです。しかも、最も適当な時期にそうするのですから、早過ぎるということは決してありません。

あとで、人間の脳の働きについて述べますが、とにかく、環境からの刺激を受け、それに反応して育つ働きは、生後の三年間で一応完成されてしまいます。しかも、視覚的なものを吸収する能力は、一生のうちで三歳ごろがほとんど最高なのです。そして、もし刺激が多すぎたり、吸収するに耐えない場合には、吸収を中止する――受けつけることをやめますから、おとなが心配するような負担過重ということは起こりません。空腹ならどんどん食べ、満腹すれば自然に飲食をやめる、それと同じです。その意味でも、無理やりに教え込む教育は、満腹したもののロを強引にあけて詰め込むようなものですから、これは大変な弊害をともなうにちがいありません。ことに漢字教育と言えば、すぐ詰め込み教育を連想するほど、今までの多くは詰め込み式でした。しかし、そうではなくて、幼児が喜んで覚えてしまう方法を知っていただこうと思います。

そこにはなんの負担もかからない

物事を記憶するには、第一に〝関心〟第二に〝反復〟が必要です。とりわけ〝関心〟は、記憶のため

の絶対必要条件です。〝心ここにあらざれば見れども見えず、聞けども聞こえず〟で、関心のないことは、いくら反復して見せ、聞かせたところで、心の目、心の耳が見聞きしていないのですから、記憶されるはずがありません。

人の顔でも、関心のない人の顔は、何回会っても記憶に残りませんが、強く関心を持って見た人の顔は、たった一度だけの経験でも、心に強く印象づけられて記憶に残ります。

しかし、どんなに強い関心を持って、心に印象づけられ記憶されても、ただそれだけで二度と経験することがなければ、その記憶はだんだん薄れていきます。

したがって、記憶を必要とする学習では、まず、記憶すべき物事に、子どもの関心を持たせるように仕向ける（その方法はあとに出てきますが）ことが第一で、第二には、その記憶を保たせるために、反復して経験させることが必要です。

一般に、記憶できたと思うと、途端に反復をやめてしまいがちです。しかし、反復は、記憶するためにも必要ですが、それ以上に、その記憶を保持するために必要なのです。

今の大脳生理学では、三歳ごろまでの幼児の脳は、おとなの脳よりも強い吸収力がある、と考えられています。ただ、その吸収力は、耳目に触れるものを、なんでも覚え込むというもので、取捨選択して覚えるという働きはありません。

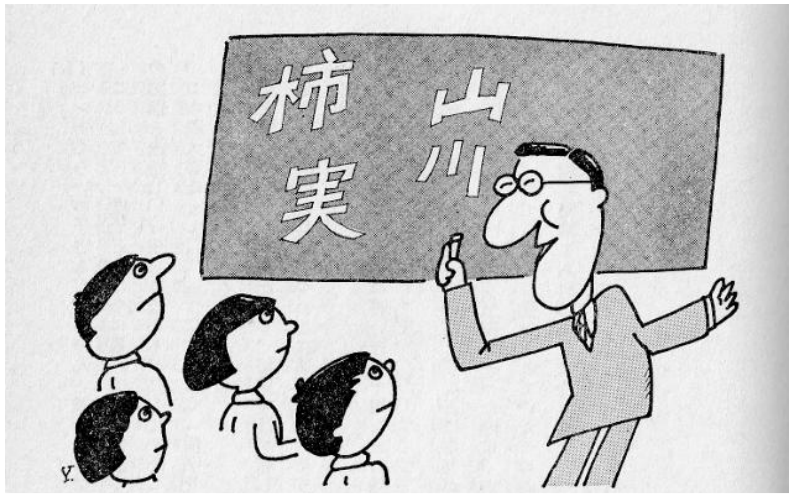
つまり、〝理解して覚える〟という働きは、三歳ごろから後に、だんだんと発達していく能力なのです。〝理解して覚える〟ということは、裏返せば〝理解できないと覚えられない〟ということですから、何でも吸収するという覚え方は、四歳ごろまでが絶頂で、あとは次第に衰えていくと考えられます。

ですから、日常生活を成り立たせる〝言葉〟や、それに関連のある〝文字〟などは、〝理解して覚える〟段階にはいるまえの、何でもかんでも吸収する幼児期に、できるだけ覚えさせた方がよいのです。

幼児が何の努力もせず、負担も感じないで、つまり〝内なる力〟によって覚える時期に、多くの言葉や文字を覚えさせることは、幼児のその後の生活に非常に役立ち、知的発達の上に著しい効果を発揮します。

覚えたい意欲におとなは手助けを

漢字の場合、四歳ごろの子どもは、ひとたびこれに関心をもってながめますと、ただそれだけで覚え



てしまいます。

わたしは、幼稚園をまわって、園児たちによくお話をしますが、話しながら、その話の中に出てくる言葉を、さりげなく黒板に書きつけていきます。たとえば、山・川・柿・実というようにです。

すると子供たちは、「おや、何を書いたんだろう」という顔つきでそれをながめます。「何だろう」と、つぶやく声も聞えます。しかし、わたしはそしらぬ顔で話を続けます。

話の中に、もう一度〝柿〟が出てきた時、「柿が……」と言いながら、黒板の柿という字を指さします。すると、「あれ柿という字か」とつぶやく声が問こえます。つぶやかなくても、多くの子どもたちは、柿という字を目に焼きつけてしまうのです。

やがて話が終わって、黒板の漢字を読ませてみますと、十字から二十字くらいの漢字だったら、たいていまちがいなく読めるようになっています。それらの漢字を次の日読ませてみますと、八十パーセントくらいの子どもが、ちゃんと読むそうです。

こうして、一度子どもたちに書いて見せた漢字は、その後たびたび書いて見せることによって、その記憶を保持し、一生忘れないものにしてやることができます。

この際大事なことは、話に先立って、「漢字を書きますよ」とか「漢字を教えてあげます」とか言わないことです。

話を聞くことに一心になって、幼児の目が話し手に集中しているなら、さりげなく書かれた漢字にも必ずひきつけられて見つめるに違いなく、そうすれば、幼児はその漢字の形を頭に刻み込まずにはおきません。

ですから、無論、黒板に書いた山や川などの漢字を「覚えなさい」と言う必要はありません。ことに、四歳を過ぎた幼児には、〝教え込もう〟という態度をもつと、かえって〝やる気〟をおさえることになり、そっぽを向かせてしまうことになりがちです。「漢字を覚えようと覚えまいと、そんなことは問題

ではない」という気持でやった時に、かえってよく覚えてくれるものです。ところで、三歳ごろまでは、何でも素直に受け入れていたものが、四歳ごろになると、〝やる気〟を出して、自分なりの考えで物事を取り入れるようになります。つまり、〝やる気〟を育て、〝やる気〟に訴えるようにしなければいけません。それにはどうすればいいでしょうか。

２　幼児の意欲

自発的な意欲を育ててこそ

世の中には、〝やる気〟を育てるどころか、反対に、おさえこんだり、ねじまげている親がなんと多いことでしょう。ただ親の意志で子どもを動かそうとします。すると、頼もしい子どもなら必ず反抗するはずです。そうであることが、四歳以後の子どもの本来の姿だからです。

にもかかわらず、こういう時期に、いつまでも親の意志を一方的に押しつけていると、子どもは反抗のかたまりになるか、いつまでたっても〝やる気〟のない、頼りない子どもになってしまいます。親の意志どおりに動くような子どもを〝素直な子ども〟だと喜んでいては、とんだまちがいです。

それは〝無気力〟というものです。わたしは、ほんとに〝素直な子ども〟というのは、理解力があり、実行力に富み、子どもなりに真剣に考え、自分に納得できて初めてそれを実行する子だろうと思います。幼児はもともと〝やる気〟のあるものです。疑問があればほうっておきません。うるさいほど質問するのはそのためです。ですから、漢字があれば、それはなんであるか知ろうとし、そして必ず質問するはずです。親はこの質問を喜び、機をのがさず教えてやれば、幼児はたった一度でその漢字を覚えてしまいます。

ところが、漢字の質問などされると、たいていの親は、それに対して、学校へ行くようになればわかる、という言い方で、教えることを避けます。これでは、子どもは漢字を覚える機会を失うばかりでなく、漢字への関心をも失ってしまいます。

ほんとうの頭の働きは、知識を蓄えることではなくて、その蓄えた知識を使うことです。知識を蓄えるだけなら、あるいは〝やる気〟がなくてもある程度可能でしょうが、使うとなると、〝やる気〟がなくては使えるものではありません。

もともと、幼児は、三歳ごろから、ぼつぼつ〝やる気〟の芽を出し、四～五歳になると、何かを求める行動が活発になるものです。何かを求めてそれが成功した時の快感が、また次の何かを求める気持を誘います。これが〝やる気〟なのです。

何かを求めてそれに成功した、それだけでも〝やる気〟は育ちますが、それを親に認められ褒められると、その成功の喜びは一層強まり、したがって〝やる気〟も一層強まります。

意欲のあるところに楽しみと進歩

先年、ヴァイオリン指導で有名な鈴木鎮一先生からこんなお話をうかがいました。先生の幼いお弟子さんたちよりも、そのお母さんたちのほうが熱心で、肝腎の習う子どもには〝やる気〟がない、ということがあるそうです。そういう子どもには、一か月でも二か月でもヴァイオリンに手を触れさせないで、ただ皆の練習するのを見学させておくのだそうです。人間というものは不思議なもので、「してはいけない」と言われて禁じられると、かえってそれをしたくなるものです。ヴァイオリンを持つことを禁止された子どもは、日ごとに「持ちたい」「ひきたい」という気持を強めてきます。そうしてひきたくてたまらなくなった時に、初めてヴァイオリンを持たせるのだそうです。もはや〝やる気〟十分ですし、音を出すことができた喜びが、さらに〝やる気〟を増す、ということになります。ですから、苦痛をともなう練習も少しもいとわずに、夢中になって練習します。〝進んで負えば重荷も重からず〟で、自分から求めてする練習なら、その練習のつらさも決してつらくなく、苦痛も決して苦痛にはなりません。

このごろ、幼児のうちから音楽教育を受ける子どもが多くなってきていますが、多くは子どもの気持に関係なく、ただ母親の気持だけで子どもを叱咤激励してやらせている、というのが普通ではないでしょうか。しかし〝やる気〟のない練習では、いくらやらせても進歩がありません。いや、進歩がないだけでなく、音楽そのものがきらいになってしまいます。

漢字教育でも同じことです。母親が、子どもに漢字を覚えさせたいとどんなに望んでも、子どもにその気がなかったならば、どうすることもできません。ところが、母親は、「漢字に強い子は成功する」と聞くと、漢字を教え込もうと夢中になりやすいものです。

一体、教育というものは、子どもを何かに夢中にさせることであって、教育に当たるものが夢中になっては、冷静を欠き、正しい判断ができないので、処置を誤って失敗します。

子どもが求めるようになる条件をつくり、そして求めるのを待って、その機をのがさず教えてやれば、なにごとも一度で覚えてしまいます。

親というものは、子どもに対して貪欲なものです。子どもにとって少しでも有益になることだと思えば、あれもやらせたい、これもやらせたいと思います。それは、親の情として自然でしょうけれども、教育に当たっては、もっと理性的でなければいけません。

いくらカツオブシが好物でも、食べる気がないときには、猫も顔をそむけます。人間である幼児が、望みもしないことに努力するはずはないのです。

ところが、親は、理屈ではそれがわかっていても、やはり自分の要求を子供に押しつけようとすることをやめません。ここに、親が子どもの教育に失政しやすい理由があるのです。

世界一の大教育者である孔子でさえも、わが子を教えることが少なかったのは、やはり〝子を教えることのむずかしさ〟を感じていだからでしょう。わたしたちは、このむずかしさを常に心に留めておくことが必要だと思います。

第2章　漢字のすばらしさ

Ⅰ　能力と国語力

科学・技術の進歩も基本は国語力

近ごろ、水平思考という言葉で有名なケンブリッジ大学の教授デボノ博士が、「イギリスではせいぜい数千部も売れれば上出来と思われる技術書が、日本では十万部以上も売れる。この読書エネルギーは、やがて日本を世界一にするだろう」と言っています。

たしかに、明治時代の発展も、第二次大戦後の興隆も、共にこのエネルギーによるものだということができましょう。

日本人くらい書物や新聞雑誌をよく読む人種はありますまい。混み合う通勤電車の中でも、多くの人が何かを読んでいます。たとえそれ がスポーツ新聞であっても、とにかく、階層の区別なく活字を読んでいる。これは諸外国には見られない日本人の日常の姿勢の一つと言えましょう。



この特異性が、日本人の知識を向上させ、技術を向上させ、短時日の間に先進国の文明に追いつき、追い越させた、最大の理由だと言えましょう。

以前、朝日新聞に、「科学技術教育と国語教育の重要性」という題の社説が載ったことがあります。それは次のような要旨のものでした。

近ごろ、科学技術教育の必要性が叫ばれているが、それにつけても、その根底にある〝国語〟の教育の重要性を忘れてはならない。極度に正確な表現と理解とを要求する科学を学ぶには、細かい知識や技術そのものよりも、学問研究のための基礎としての国語をしっかりと身につけることが肝要である。

科学を修めるためには、まず、先人の著述や記録を正確に理解する〝読解力〟を必要とする。

次に自ら観察し、実験した所を、論理的に精密に記録する〝表現力〟を欠くことができない。つまり、科学や技術に限らず、あらゆる学問が進歩する根底には、それぞれの国の〝国語〟の力というものがあるのだ。

この考え方は大切です。良い花を咲かせたい人は、花そのものには手をかけないで、まず土に肥料を施し、水を与えることに専念します。科学教育と言い、技術教育と言うのも、いわば、豊かな土壌である〝国語教育〟の上に咲く花です。科学教育だ、理科教育だと騒ぐまえに、まず国語教育をしっかりやらなければなりません。

日本人の読書エネルギーの源泉

人は言葉でものごとを考えます。ですから、理解する言葉が多ければ多いほど、その人の思考の幅が広く、理解する言葉の深さが深ければ深いほど、思考の精密度も高いわけです。言葉を正確に豊かに使う人が、あらゆる方面で成功しているというアメリカの研究報告がありますが、考えてみれば至極当然

のことと言わなければなりません。

ところで、デボノ博士を感心させた「日本人の読書エネルギー」は、どこから生まれるのでしょうか。

それは、よく言われるように、日本人の勤勉さからでしょうか。

勤勉さもさることながら、わたしは、日本人の持つ高い読書能力、国語力から生まれる、と考えています。

およそ、世の中に、読書能力さえあれば、読書ほど、永続的に楽しくて有益なものは他にありません。ただ、読書能力が低いと、読んでも十分に理解できないので、読書が楽しめないのです。

わたしはむしろ、読書能力の高いことが日本人の読書エネルギーを生み出しているのであって、日本人が勤勉だと言われるのは、その結果だと思うのです。

偉大な発明――漢字かな混じり文

では、日本人はなぜ外国人に比べて読書能力が高いのでしょうか。

その理由は、当然、日本固有のものの中になければなりません。つまり、わが国固有の表現法〝漢字かな混じり文〟にある、と思われます。日本語は、表意文字（実は、表語文字と言うべきもの）である漢字で書き表わすのが良い言葉と、表音文字であるかなで書き表わすのが良い言葉とからできています。漢字かな混じり文は、そういう日本語のために発明された、世界に類のない表現法で、これが読書能力を非常に高めているのです。

あとで述べますが、漢字は、言葉を直接表わしていますので、一目でそれが何を意味しているかを知ることができます。ローマ字やかな文字は、表音という手段によって間接に言葉を表わすので、文字の目的である〝表意性〟の点では機能的にどうしても漢字に劣ります。

しかし、表意性に優れた漢字でも、漢文や現在の中国語のように、漢字ばかり並びますと、決して読みやすくありません。つまり、漢字ばかりの文章でも、また、かなばかりの文章でも読みにくいのです。これにひきかえ、漢字とかなとが適当に混じり合った〝漢字かな混じり文〟は、双方の特長を生かして読書をしやすくしています。そして、それが日本人の読書能力を高めているのです。

２　漢字の偉力

漢字は一目で意味がわかる

名神高速道路ができた時、道路指示に使う最もよい文字を選ぶために実験したところ、ローマ字で書いた場合、判読に十数秒かかり、かなで書かれたものは数秒、そして、漢字の場合は、数分の一秒で読める、ということがわかりました。

国語に「ハナ」という言葉があります。「突き出たところ」というような意味の言葉ですが、草木の花も、顔の鼻も、同じく「ハナ」です。ところで、鼻から出るものを「洟」と書きます。「ハナ」と書いたのでは、それがなにをさすのかはっきりとしませんが、これを花・鼻・洟と書き分けると、一目ですぐに意味がわかります。それに、「花」という字には、たんとなく美しい雰囲気がありますが、「洟」には、汚らしい雰囲気があります。見るからに胸が悪くなるような字で、ズルズルという音さえ聞こえてきそうな気がします。

このように、漢字というものは、それぞれに鮮やかな印象を秘めていて、一目見ただけで正しく早く、その文字が意味するものを呼び起こしてくれます。思想の伝達という機能を果たす上で、漢字ほど優れた働きを持った文字は、他にありません。

言葉は、録音しておかなければ口から出た途端に消えてしまい、しかも、ラジオやテレビのような手段によらないかぎり、その伝わる範囲もごく近くに限られます。ところが、文字になりますと、時間的にも空間的にも、その効果がずっと大きくなります。

文字というものは、そういう機能を持ち、言葉の短所を補うものとして生まれたものですが、もう一つ注意すべきことは、文字が、言葉では精密に区別し、表現できない点まで表現できる、ということです。

先の例の「花」「鼻」「洟」もそうですが、「見る」「看る」「視る」「観る」という表記もそうです。これらは、英語のsee, look, inspect, observeに当たる意味を表わしています。つまり、「見る」は「何気なくみる」ことであり、「看る」とあれば、「みようとしてみる」ことであり、「視る」とあれば、手落ちはないかと「注意してみる」こと、そして「観る」とあれば、「細かい点にまで心を配ってみる」ことであるのがわかります。

ですから、「川をみる」という表記では、どういう態度で川をみるのかわかりませんが、「川を見る」「川を看る」「川を視る」「川を観る」と書けば、その川をどのようにみているのかがはっきりとわかります。

このように、言葉では不可能な点まで表現できるところに、漢字の、文字としての大きな特長があるのです。これが漢語の表記となりますと、一層その特長がはっきりしてきます。

わたしは、六年生の教科書を見ていて、「こう水」という表記を目にした時、一瞬とまどいました。それは「洪水」のことだったのですが、わたしはその「こう水」を一瞬、「こうすい」と読んだのです。「こうすい」では、「香水」か「硬水」か「鉱水」になってしまいます。つまり、小学校では、これらの漢字を教えないで、「こう水」という表記で教えているのですから、じっさいの「洪水」「香水」「硬水」「鉱水」という言葉を理解させることはできないのではないかと思います。

「こう水」という表記がこれこれの四つの言葉をあらわすということは、説明してやることはできますが、それでは子どもにはとても理解できないでしょう。

ところが、この「こう」を洪・香・硬・鉱という漢字にすると、それぞれ明瞭な意味を持っていて、決して紛れることかありません。だから、漢字で学ぶことは、かなで学ぶよりも、ずっとやさしく能率的なのです。だから、漢字で学んだ子どもたちは、「かなばかりの本は読みにくくて意味がわかりにくい」と言っているのです。

つまり、漢字を学ぶことは、概念を明確にすることであり、物の考え方をはっきりさせることになるのです。だから、「漢字の学習は頭脳を明晰にする」と言うことができます。

かなだけでは精密な思考ができない

「こう水」や「はな」「みる」という表記では、思考力が育だない。「洪水」「香水」……「花」「鼻」……「見る」「看る」……という表記で言葉を学習しないと、概念をはっきり理解することができず、言葉があいまいになり、精密な思考ができなくなる。だから、言葉を漢字で教える。――これがわたしどもの漢字教育なのです。

昭和四十一年三月、朝日新聞は「石井方式を考える」という社説を掲げ、「石井方式はよく〝漢字を教える教育〟のように言われているが、そうではない。〝漢字で教える教育〟である」と解説しました

が、いまでもなかなかこのように理解してくれる人は多くありません。

たとえ漢字が書けるようにならなくても、漢字を覚えて漢字で学習することにより、言葉の持つ意味を正しく理解できれば、十分とは言えないまでも、それで結構だ、とわたしは考えています。ですから、漢字を学ぶことを目的とする漢字教育ではないのです。

もちろん、できるだけ漢字が書けるのに越したことはないし、じっさいに漢字で学習していれば、いつとはなしに、漢字を覚えてしまうものです。

平安朝の昔から、かなは女手、漢字は男手と呼ばれて、漢字はむずかしいものだと考えられています。たしかに字数が多いばかりでなく、字形が複雑なので、いかにもむずかしそうに見えます。

しかし、漢字は、文字であると同時に、語でもあるのです。たとえば山・川・花・月などの文字は、英語のmountain, river, flower, moon という語に当たっています。英語の場合、アルファベットだけ覚えても文章を読むことはできません。一語一語、何千という語を学ばない限り、書物を読むことはできないのです。

とすれば、漢字は字数が多く、字形が複雑なのは当然のことなのです。「整」という一字など、英語になおせば、「to put (things) in order」という言葉になります。つまり、「束」が「things」で、「攵」が「put」の意味に当たり、「正」が「order」の意味を表わしているのです。これだけの意味を、ただ一字で表わしているのですから、その字形が複雑になるのは当然とわかりましょう。

整という字を構造的にいうならば、木に輪をかけて「束」をこしらえ、これがきちんとそろうように、棒を手にしてたたく（攵はで、手に棒を持つ意味、牧、教、攻の攵は皆この意味）ことで「正」しくなり、すなわち「整」うのです。

3　漢字――このやさしさとおもしろさ

精薄の子の目に輝き

一年生で、一年かかってもかなが一字も覚えられないという知能の劣った子どもがいました。ところが、この子どもに、漢字を教えてみたところ、急にその目が輝き、どんどん覚えたのです。〝雲〟と〝雪〟とをまちがいなく読み分け、〝鳥〟と〝烏〟もまちがいなく読み分けました。〝門〟という字など、た



だ一度教えただけなのに、覚えてしまいました。

これには、わたし自身驚きました。しかし、前にも述べたように、記憶するために第一に必要なことは〝関心〟です。関心がなければ、どんなに学習させても、また学習しているように見えても、実質的には決して学習にはなっていないのです。

知能が低ければ低いほど、抽象能力が劣るものです。したがって、抽象的な文字であるかなには興味が持てず、心がかなに向かないので、「くも」「ゆき」といくら教えたつもりでも、具体的な、あの「空に浮かぶ雲」「降る雪」と結びつかない。ですから覚えられるはずがないのです。

ところが、〝雲〟や〝雪〟だと、よく知っている物であり、言葉ですから、〝関心〟が持てます。〝関心〟が持てるから、それが心に残って、読めるようになるのです。

つまり、かなの覚えられない精簿児も、漢字ならどんどん覚える。このことをわたしどもは実験によって確かめています。

絵本の説明も漢字だとわかる

漢字には、以上のような性質があるので、幼児に喜ばれるのです。つまり、むずかしいなどというものでは全くありません。努力なし、負担なしで覚えられるのです。

ですから、絵本に、かなばかりを使うことくらい愚かなことはないのです。幼児にわかりにくいかなを使ってわざわざむずかしくし、おもしろくないようにしているのですから。もし漢字が多く使われていたら、子どもたちがどんなに喜んで本を手にするかしれません。

わたしが、このことを絵本を出している人に話したところ、「おっしゃることはもっともと思います。ただ、それでは世の中のお母さんたちから文句が出るでしょう。買ってもらえない。それでは出すわけ

にはいきませんので」ということでした。

先に幼児開発協会の講演会で、理事長の井深大氏が「母親が考えねばならぬこと」という話をされましたが、その中で「今日の教育というものは、わざわざ、子どもにとってわからなくなる、あるいはむずかしくなる年齢まで待って、それから一生懸命やらせている。子どもが受けつける時期をすぎてから、一生懸命詰め込もうとして、親も学校も社会も苦労しているのではなかろうか」とおっしゃっていました。この指摘は、漢字教育だけとってみても、正にその通りなのです。

幼児期に学ばせれば、まったく自然に、覚えようという苦労もなく習得し、そのために楽しく読書できるようになるものを、記憶力の衰えた時を待って学ばせているのです。この誤りから、まず世のお母さん方が脱け出していただきたい。それは子どもの将来のために、想像以上にだいじなことです。

「人間も動物なんだね」

漢字教育をしている幼稚園のことです。

節分の日に、黒板に〝節分〟という字を書いて、先生が話しました。「節分とは、季節の分かれめという意味の言葉です。冬の季節が今日で終わります。寒い風の吹く、いやな冬、行ってしまえ、という気持で、〝鬼は外〟と言って豆をまくのです」とすると、園児の一人が「じゃあ、〝福は内〟って言うのは〝春よ来い〟ってことだね」と言ったのです。

その次の日は、〝立春〟という字を書いて「きょうは〝立春〟の日です」と言って、その話をしたところ、こんどはまた別の園児が「こよみの上では春だけれど、まだ寒いね」と言って、先生を驚かしたのです。

言葉は、言葉として説明されただけでは理解しにくく、記憶にもとどまりにくいものです。ところが、文字と共に説明されると、理解しやすく、また、記憶にもとどまりやすくなります。〝節分〟が〝季節の分かれめ〟であり、〝立春〟が〝春の立つ日〟であることは、言葉だけの説明では決して理解され記憶されるものではありません。

ところが、漢字と共に説明されますと、幼児でもちゃんと理解し、言葉を漢字と共に記憶し、それを正しく生活の上に使えるようにまでなるのです。

わたしが、一年生に、初めて漢字教育を実験した時のことです。教科書に〝どうぶつえん〟という言

葉が出てきたので、これを〝動物園〟という漢字に直して教えました。

すると、子どもたちが「先生〝動物〟って、〝動く物〟って読めるね」と言うのです。わたしは、「ああ、よく気がついたね。君たち、チューリップやたんぽぽや桜の花が生き物だってこと、知っているだろう。でも、お花は動けないね。生き物には、だから、動ける物と動けない物といるわけだ。それで、動ける物は〝動く物〟と書いて〝動物〟ということにしたんだよ」と言いました。

すると、子どもたちは、初めて聞くという顔をして目を輝かして聞いていましたが、「先生、じゃあ、とんぼもちょうちょも動物なの」と、驚いたように尋ねました。

「ああ、そうだよ」と答えると、他の子が「じゃあ、金魚もだね」と言います。子どもたちは、とんぼやちょうは虫であって動物ではない。水の中に住むものは魚であって動物ではない、と思っていたのです。

これは、子どもに限りません。おとなでも、〝動物〟を〝哺乳動物〟に限って使う傾向があります。ところが、最初から漢字で学習すれば、一年生でも正しく理解するのです。

最後にある子どもが言いました。「先生、人間もやっぱり動物じゃあないの」

応用問題を解く鍵も漢字力に

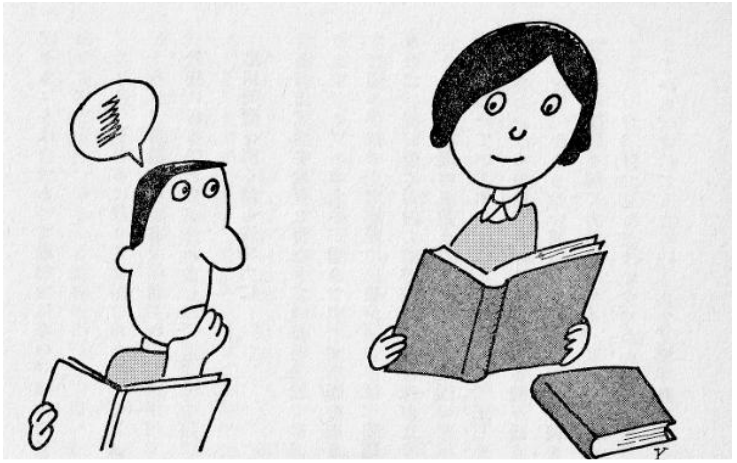
石井方式漢字教育を行なっている小学校では、一年生でも算数の文章題（応用問題）が実によくできます。クラスの大半が満点です。文章題をやるのが楽しくて仕方がないのです。

普通の学校で、文章題の成績が悪いのは、問題を解く力がないためではなくて、かなばかりの文章なので、読むのに苦労して、読んでも意味がよくわからないので、式を立てることができないのです。

それは文章題の点数０の子に、その問題の文章を読んでやってからやらせてみますと、すぐわかります。たいてい、すらすらと式を立てて、正しく計算してちゃんと答を出します。

文章というものは、全体をすらすらと読み通さないと、その意味がわからないものです。ですから、一字一字、かなを拾い読みしていたのでは、何をどうしろと言われているのか、わからないのです。つまり、問題を解く力はあっても、式が立たないのです。

ところが、目で見ただけですぐわかる漢字を多く使った文章だと、すらすらと終わりまで読み通せますから、すべてうまくいきます。漢字教育をとり入れたクラスのほとんどの子どもが満点を取れるのはそのためです。



文章題はきらわれがちですが、その文章がすらすらと読めて意味がよくわかれば、単なる計算問題よりずっとおもしろくて好かれるはずです。

このことは、算数の文章題に限ったことではありません。理科の学習でも、社会科の学習でも、かなばかりで書かれているために読んでも意味がわからないとか、反対に、漢字が多い参考書だと、漢字が読めないのでその参考書を十分に活用できないとか、そういうことのためにできない場合が非常に多いのです。

この意味でも、早い時期に漢字力を養っておくと、漢字を多く使った、本格的な書物を早くから読むことができて有利です。幼稚な書き方の本よりも、本格的な書物の方が、読む力さえあるならば、おもしろく読める。おもしろく読めれば、読めないと子とのあいだに格段の差が生じ、その差が拡大していくことも当然でしょう。

近く工学修士になるはずのわたしの長男は、石井方式漢字教育の実験第一号で、幼稚園のころ、すでに小学校四年生くらいの本だったら、らくに読めるようになっていました。

そのため、小学校の低学年のうちから、わからないことは、自分で百科事典を引き出して調べるようになり、特に興味をもっていた理科方面の知識は、学校の先生を驚かせていました。

かれは「自分が数学や理科が得意になったのは、父の漢字教育のお陰だ」と語っています。漢字教育が国語力を育て、その国語力が機械工学の世界のおもしろさをわたしの長男に見せてくれたのです。

先に引用した「科学や技術に限らず、あらゆる学問が進歩する根底には、国語の力があるのだ」という朝日新聞の社説は、単なる理屈ではなくて、事実の裏づけを持った主張なのです。

第3章　漢字と仲よしにさせるには

Ⅰ　石井式漢字教育の歩み

どのように始まったか

石井方式は、昭和二十六年に発表されました。当時わたしは、八王子市教育委員会の指導主事をしていましたが、東京教育大学で行なわれた全日本国語教育協議会の全国大会総会で、意見発表をしました。それは、長男で行なった実験を基にした、単なる意見発表に過ぎませんでしたが、それから二年後の昭和二十八年から本格的な実験に移ったのです。その実験は、翌二十九年には、中間発表として、二十六年に発表した意見の正しさを裏づけるに足る報告を、東京都教委の機関誌「教育時報」に発表しました。

以後、毎年のように、研究発表・公開授業等を続けてきたのですが、その結果、わたしの意見に感心したり、教育の成果を賞讃してくれる先生方はふえました。けれども、わたしの方法を実践しようとする先生はなかなか現われませんでした。

昭和三十六年、『私の漢字教室』（黎明書房発行）で、二十八年から三十五年までの実験をまとめましたが、この頃から、全国のあちこちに、実践する先生がぼつぼつ現われ始めました。

新潟県亀田町の袋津小学校は、笠原校長を先頭に全校教職員挙げて、石井方式の研究と実践とを推し進めてくれました。わたしは、昭和三十七年の二月以来、数回訪問しましたが、訪問のたびにその研究と実践は向上のあとが見え、その後、統合によって廃校となり、実践が中止されましたが、石井方式実践校の貴重な参考資料が残っています。

静岡県熱海市の桃山小学校は、昭和三十八年に当時の岩崎校長の熱心な提唱によって始められ、その後、校長は何回か変わりましたが、今も続けられています。神奈川県立教育センターでは、この桃山小の研究に注目し、たびたび指導主事を派遣するなどして、神奈川県の実験学校と共通の問題により、石井方式による指導の結果と、文部省方式による指導の結果とを比較し、考察を加えるなどして、これをたびたび機関誌に発表しています。公立の教育機関が、このような努力を払っている例は他にありません。

静岡県富士市の須津小学校の実践も、数年に及んでいます。ことに、同校は、ここ三年にわたって、

富士市教委の研究指定校として、石井方式実践の跡を、公開授業と共に広く発表しており、関東、関西からも見学に訪れる先生が少なくありません。近畿大学付属小学校の全校実践は、昭和四十二年に始まりました。わたしは校長楢崎浅太郎先生の依頼を受けてたびたび訪問していますが、大きな期待を寄せているものです。

その他、北海道から四国、九州に至るまで、熱心な実践家が現われて、この研究をいろいろな面から進めています。しかし、残念なことには、石井方式漢字教育を進めていくための拠り所となる教科書がありません。そのため、検定教科書の全ページにわたって、かなの部分に用意した漢字を貼りつけています。

この作業は準備が大変です。改めるべき漢字の選定――これは先生方の最も神経を使う仕事です。漢字の印刷――大方はガリ版によって、手刷りします。しかも、その漢字が、かなの部分を過不足なく隠すようでなければなりません。また、そのように正しく貼りつけ作業ができるような指導とその手順が大変です。うっかりしますと、「私」が、「わ」だけを隠して「私たくし」となったり、「た」だけを隠して「わ私くし」となったりしかねません。

石井方式を実践して下さる先生方は、ことなかれ主義の校長などから敬遠されながらも、ただ、子どもたちの幸福だけを考えて、このような苦労をあえてしているのです。

制約の少ない幼稚園に注目

数年前、わたしは求められて、使用漢字についての石井案を文部省に提出しました。わたしは、一年生に最も多く提出すべきだと思っていますが、それはすぐには容れられるはずがないと思い、百二十字を選んで提出しました。

その後、「今までの四十六字の二倍、九十字くらいに落ち着きそうだ。ここまでいけば大成功ですよ」と、文部省の先生が教えてくれましたが、結局は、一年生が七十六字になってしまいました。これは、現状を変えることを喜ばない現場代表の先生の意向を反映した結果なのです。

決定してしまったあとですが、その先生が「これで成功すれば、次の改定の時には、百五十字にもっていくこともできる。そして、それに成功すれば、その次には、三百字にできる……」と言われました。

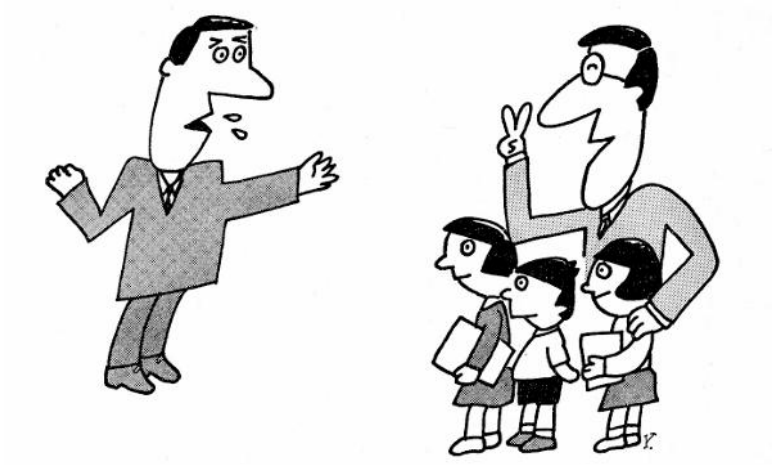
歯がゆいけれども、これはもっともな意見にちがいありません。文部省としては、いかに教育効果を目指すとは言え、簡単に変えることは許されません。くるくる方針を変えてばかりいたら、大変です。そう思ってわたしも、あせらないことにしました。

とは言っても、手をつかねていたのでは、事態は動きません。全力を尽して引っ張っても、ゆるゆるとしか傾かないのですから、力を出し惜しんでいたら、世の中は少しも動きません。

そこで「学校教育よりもそれ以前の幼稚園教育を考えよう。これを前進させれば、自然小学校も前進しないわけにはいかない。幸い、幼稚園教育は、小学校教育ほどの制約を受けていない……」と考えました。

こういうわけで、今、幼稚園の石井方式漢字教育が始まったのですが、この新しい作戦を考案し、計画し、実践して下さったのが、大阪市の小路幼稚園の井上文克園長です。

井上先生がわたしの著書を読まれたのは、昭和四十二年の十二月末のことです。読み終わってすぐ、取る物も取りあえずという形で上京し、わたしの家を訪ねてくれたのです。その時先生は、「石井方式の普及、日本の教育の改革は、まず幼稚園から手をつけるべきではないか。幼稚園は、それには最も適した場である。わたしにお任せ下さい」とおっしゃったのです。



その後、大阪で準備された会にたびたび出席して、多くの園長先生方に石井方式漢字教育の実践について話したり、奨めたりすることになりました。

「幼児が漢字を覚える？　ほんとだろうか。ほんとだとしても、それは一部の幼児に過ぎないのではないか」――そういう考えの園長が多かったと思います。しかし、わたしと井上先生の熱意が通ってか、実践に踏み切る幼稚園がどんどんふえていき、たちまち、数十の幼稚園がこの教育を力強く推し進めてくれるようになったのです。

漢字を使って〝お話〟を見せる

抵抗は初めからありました。ある園長は「わたしは、幼稚園でかなを教えているのさえ苦々しく思っています。まして、漢字を教えるなんて、とんでもない暴挙です」と、顔色を変えてわたしに食ってかかりました。

「わたしも、今までのような漢字教育なら反対ですし、ことに、幼児にかなを教えるのには大反対です。ですが、だまされたと思って、二十分ほどでよろしい。園児をわたしにお貸し下さい。わたしの〝漢字教育〟というものをお目にかけます。その上でご批判をいただきたいと思います」

わたしはこう答えて、実際に指導をしてみせました。「お話をしてあげましょうね」と言って、園児たちに話をしながら、その中に出てくる言葉を黒板に書きつけていく方法です。

十分か十五分の話の中にくり返し出てくる言葉を黒板にいっぱい書きつけました。その漢字は全部で三十字くらいはあったでしょう。話が終わって、わたしが黒板の漢字を指さしますと、皆、元気よく読みます。ずっと前から知ってたよ、というような顔で読む園児たちの様子を、じっと見つめていた園長は、指導が終わって園長室に引き上げるとすぐ言われました。

「このような漢字教育なら、うちの園でも早速やらせていただきます」と。

漢字教育というと、すぐ漢字の詰め込み教育だと思われるところから、言下に「とんでもない」と言って否定されがちです。また、「漢字教育より先に、すべきことがある」とも、よく言われます。これに対してわたしは言うのです。「先にすべきことがあるなら、それを先にやって下さい。ただ、その、すべきことに漢字をお使い下さい。とくに〝漢字を教える〟のではありません。〝漢字で教える〟のです。漢字で教えた副産物として、幼児が漢字を覚えることを期待しているだけです。ですから、覚えなくても一向かまわないのです。しかし、たとえ覚えなくても、見せておけば、それだけのことはあろう、と考えているのです」〝ローマは成るの日に成るにあらず〟です。漢字もまた読める日の前に、読めないけれども、読めるための下地となる〝読み〟がなければなりません。〝漢字で教える〟教育とは、そういう下地になるためのものです。

くり返して見る幼児の喜び

わたしたちは、〝容易に覚える〟ということを、安易に喜んでいてはまちがいます。幼児は、気が向

けば（〝関心〟をもてば）どんな漢字でも一ぺんに覚えてしまいます。しかし、容易に覚えたものは容易に忘れることも、免れがたい事実です。

なかなか覚えなかったが、ようやく覚えた――こういう覚え方をした場合は、容易に忘れないものです。記憶が長持すれば、その間にまたその漢字に出会う機会にぶつかって、復習しますので、さらに記憶は確かになります。そう考えると、「物覚えの悪い子は幸いなり」と言えそうです。

覚えようと覚えまいと、忘れていようと忘れていまいと、とにかく使う機会があったら、一つの漢字を何回でもくり返して提出し、読む機会を与えることが必要です。

皆、よく覚えたから、もうよかろう。――こうした考え方は、漢字教育に関する限り誤っています。つまり、皆、よく覚えたから、よけい使ってやろう、でなければいけません。

漢字は、〝覚える〟ことが目的ではなく、〝覚えた〟あと、〝使う〟こと、〝読む〟ことが目的です。幼児が覚えたからこそ、わたしたちは、幼児に対して漢字をほんとに〝使う〟ことができるわけです。つまり、親も教師も、幼児に漢字を使って見せる機会があったら、何でもかんでも使って、幼児に漢字を読ませる機会を、できる限り多く作ることです。

幼児は、その重大な特性の一つとして〝くり返し〟が好きだ、ということがあります。三歳ぐらいまでの幼児は、くり返して飽きることを知りません。ですから、幼児の好むお話には、必ずくり返しがあります。幼児がそのくり返しを好むから、そういうお話が昔からずっと語り継がれてきたのでしょう。

「挑太郎さん、桃太郎さん、お腰につけたものは何ですか」に始まる問答は、三回くり返されます。この三回くり返されるところが、幼児にはたまらなく快い聞きどころなのです。そして、くり返しのある物語を、幼児は、くり返しくり返し聞くことがまた、この上もなく好きです。すっかり覚えてしまってからも、なおそのお話をせがみます。

こういう幼児のことですから、漢字の反復提出もまた大歓迎します。「よく覚えてしまっているから、もうおもしろがらないだろう」と気を回して反復を遠慮するのは、おとなのまちがった分別で、幼児は、「よく覚えて知っている字だから、得意になって読める」のです。

この〝くり返し〟を好む性質が〝心の若さ〟の正体です。精神が老化していきますと、〝くり返し〟がたまらなくいやになってきます。

ですから、肉体は、これを使うことによってその若さを保つように、我慢して幼児の相手になり、〝く

り返し〟をくり返してやることは、子どものためでもあり、おとなが自分の〝心の若さ〟を保つのにも役立ちます。

たくさん覚えるほどよい効果

幼児の漢字教育で、幼児があまりよく漢字を覚えるので、「こんなにできるようになって、小学校の漢字学習がつまらなくなりはしないだろうか」と、心配されるお母さんや幼稚園の先生がよくいらっしゃいます。

これもまた、老化した心で、若々しい心を推し量るところからくる見当違いです。

すでに述べましたように〝若い〟幼児の心は、くり返しを飽きるどころか歓迎します。それに、〝できる〟から楽しいのです。できて楽しいから、気に入った遊びに夢中になるように一生懸命にやります。一生懸命にやるからますます能力が向上します。

わたしは、小学校の一年生をたびたび指導していますが、漢字の書き方練習の時、わき目も振らずに書いているのは、必ず上手な子どもです。下手な子どもは、一字書いてはため息をつき、一字書いてはよそ見をしています。うまく書ける子は、それほど一生懸命にやらなくてもよいと思うのに、一生懸命にやり、下手な子は、一生懸命にやってほしいと思うのに、一生懸命になれないのです。

成功の喜び、うまく書けたという喜びを知らない子どもには、それを求めて努力するだけの意欲が燃えないのです。下手だからこそ練習しなければいけない、ということがよくわかるわたしどもおとなでさえ、やっぱり下手なことはついおっくうになるものです。

幼児も、漢字が得意になればなるほど、小学校へ行ったら、わかる楽しさから、なお一生懸命勉強します。できすぎによる心配など決してありません。〝できなくて困る〟――これこそほんとうに困った悩み、容易に救いがたい悩みです。

というのも、できない子は、いちばん励みになる成功の喜びというものを知りませんので、やる意欲が出ないからです。やっても楽しくないのです。意欲のないものが、なにをしても、楽しいはずも、うまくできるはずもありません。こうして悪循環が起こるのです。

悪循環はどこかで断ち切らなければなりません。そして、どこかが好転すれば、全体がうまくいくようになるのです。たとえば何かを褒められた、ということで〝いい気持〟になれた。そこで子どもに〝や

る気〟が出た。そのため、いままでより良くできた。それがまた認められて褒められた。――これで、良い循環軌道に乗ったわけですが、こうなれば、もうあとはどんどん向上線の一途をたどることになります。

たしかに、この図式どおりに軌道に乗せることは、実際にはなかなか容易ではありません。しかし、子どもの長所を見つけ出し、子どもの能力を引き出すことが〝教育〟だと考えるおとなら、やはりこの軌道に乗せる努力をしなければなりませんし、努力すれば必ず実りは期待できます。

見る機会をこうしてふやす

前に、「漢字教育より先にすべきことがある」という批判をする人が多いけれども、それに対しては、「漢字教育は、先にすべきその教育を漢字でするのです」と答えるのだと申しました。〝先にすべきもの〟とは、集団の中での幼児の生活の確立とか、情操教育とか、そういうことを指しているのかと思います。

ところで、わたしたちのいう漢字教育というのは、漢字そのものを教えるのではなく、右のようなことがらを指導するに当たって、そのポイントになる言葉を漢字で示しながら話を進める教育なのです。

たとえば、廊下や道路での〝右側通行〟の話をする場合でも、ただお話するよりも、これらの漢字をカードに書くなり、黒板に書くなりして、聞いている子どもたちにこれを見せながら話すのです。

子どもたちに身近なことがらを表わすこの程度の漢字は、ほとんどの子どもがすぐ覚えます。また話そのものも、ただ話した場合よりも、漢字が示されたことによって、子どもたちの意識を集中させ、話の内容を鮮明に印象づけます。

しかも、もしその翌日、同じようにしてこれらの文字を見る機会を与えるならば、特に教えなくても無言のうちに、前日の〝右側通行〟の話が子どもの心によみがえり、ひとりでに復習され、〝右側通行〟の生活指導が徹底されるのです。

２　石井式漢字学習法の五つの原則

（一）幼児期に漢字を与える

すでに述べたように、漢字は幼児に喜ばれています。幼児は漢字を楽しんで覚えています。それなのに、どうして小学校や中学校では、漢字が嫌われ、漢字学習がうまくいかないのでしょうか。

これは不思議のようですが、実は当然のことなのです。つまり、与えられたものは、それが善悪難易の区別なく、言葉でも行動でもこれを身につける能力は幼児期が最高なのですから、幼児なら漢字がどんどん覚えられても、小学生や中学生になると、そのようには覚えられないからです。

ですから、わたしは、幼児の生活環境に出てくる漢字は、幼児期のうちに覚えさせるようにしなければいけないと言うのです。漢字を覚える能力が衰えるようになってから、苦しませて学習させるのは不合理だと言うのです。

しかし、小学生や中学生になってから漢字を教えるにしても、もっと楽しく学習できる方法はあるのです。ただ、文部省がそういう指導法を取り上げていませんし、したがって、先生たちも知りませんし、試みようともしないだけのことです。

昭和四十六年の四月から、小学校の教科書が変わって、今まで六年間に学習していた八百八十一字の漢字が百十五字ふえて、九百九十六字になります。

ところが、これが決められたのは、昭和四十二年八月でした。その時、当時の朝日新聞に、〝漢字学習に一言〟という、ある小学校長の意見が掲載されました。それは、「教育課程改定に関する中間報告によれば、小学校で扱う漢字を千字以上に増加すると言う。今まで八百八十一字の漢字が覚えきれずに悩んでいるのに、この上ふやすとは何事か。この上教師と児童を苦しめるのはやめてもらいたい」という意味のものでした。

これは、右の校長だけの意見ではなく、大方がこういう意見でした。わたしはこのとき、日本教育新聞から依頼されたのを機会に「漢字は早く多く学ばせよ」という標題で寄稿しました。その中で、こう意見を述べました。

――考えていただきたい。子どもたらが社会に巣立った時、生活上必要な漢字は、当用漢字と呼ばれるものだけでも千八百五十字あるのである。その他、必要な地名・人名漢字を加えれば、優に二千字は

越えよう。つまり、この二千の漢字を知らないと毎日の新聞記事は読むことができず、社会人として十分な生活を営むことは不可能であろう。とすれば、漢字の学習は、それがどんなにむずかしいものであろうと、社会生活に必要なだけの漢字を学習させ身につけさせてやることに努力するのが、教育に携わる者の当然の義務であろう。

そういう見地に立てば、小学校で教える漢字を千字にふやしても、まだ十分とは言えないのである。生活に必要な能力を養うためには、児童も教師も苦しむのが当然のことであって、この上苦しめてくれるなどと弱音を吐くことは許されない――。

（二）たくさんの漢字を関連づけて覚える

さらにつづけてこう述べました。

――「学習する漢字がふえれば、それだけ学習負担がふえる」と一般に考えられている。常識的にはいかにもそう考えられるが、じっさいにはそうではないことが、実験してみるとわかる。小学校の一年生に提出すべき漢字は、現在四十六字と決められている。ところが、わたしは過去十四年間、この五倍から十倍に当たる三百ないし九百字の漢字を提出してきた。そうすると、学習負担も五倍から十倍になるはずだが、実は以前とほとんど変わりがないのである。それもわたしだけではなく、だれがやってみてもそうなのだ。漢字は、限られたわずかな字を、一字ずつばらばらに学ぶ（現在の学校の漢字学習法）よりも、関連のあるものを、たくさんいっぺんに学んだ方が覚えやすいのである――。



たとえば、今の漢字学習では、文部省の漢字配当表にしたがって、「読、売、言」という関連のある漢字を、二年、三年、四年と、三年間にわたり、ばらばらに学習しています。こんなことをしないで、この三字を同じ学年で教えた方が効果のあることは実験済みです。わたは、一年生にこの三字を教えましたが、その習得率は、四年生の習得率よ

りもずっと良かったのです。

一年生の漢字が年間四十六字では、互いの間に関連のあるものがどうしても少ないのです。三、四歳の幼児でしたら、関連がなくてもよいのですが、もう理解力の出てきている一年生にこういう学習をさせると、単に覚えにくいばかりでなく、これからさらに伸びる理解力の発達を妨げる危険もあります。

わたしは、「小学校六年間に学習すべき千字のうち、その半分の五百字を一年生に提出せよ」と新聞に書きましたが、それは、記憶力の強い幼児期に最も近い一年生だからということと、このように数を多くすれば、関連のある漢字がふえて記憶しやすいからということの、二つの理由があったからです。

（三）最初からほんもので学ぶ

すでに述べたように、学校の漢字教育は、根本的には教育の時期を失しています。方法的には無策といってもいい〝ばらばら学習〟をしております。そして、そのほかにもう一つ大きな誤りを犯しているために、なお効果が上がらないのです。それは、国語教育がもつ致命的な欠陥なのですが、この欠陥が明治以来のものだけに根が深く、人はみな誤りだと思いにくいようです。その誤りとは、学校・山・川というようなありふれた漢字でも、最初はこれをかな書きして、決して漢字では教えない、ということです。

なにごとについてもそうですが、最初に身についたものを途中で変えるには、大変な努力が必要となります。初めの習慣をつけるのに要した時間より何倍もの、年齢によっては何十倍もの時間をかけなければ、新しい習慣は身につかないのです。それはお国訛りのことを考えてみると、よくわかりましょう。

ですから、がっこう・やま・かわ……という表記で教えるくらい愚かな学習方法はないのです。幼児はいうまでもありませんが、一年生でも「がっこう」より「学校」の方が、「やま」「かわ」より「山」「川」の方がはるかに覚えやすいのにもかかわらず、学校では依然としてこの愚をくり返しているのです。

しかし、基本的には、じっさいに困難であったとしても、やはり最初から〝ほんもの〟である漢字で教えなければいけない、という態度を堅持することが必要なのです。

わたしは、昭和二十八年から五年間、最初から〝ほんもの〟で学ばせるやり方と、最初はかなで学ばせる普通のやり方とを比較実験してみました。

後者のやり方だと、一般によく言われるように「テストすれば書ける漢字でも、作文やノートにはなかなか使えない」「木（汽）車が木（来）た、というような誤った使い方をすることが多い」などの欠陥が出ますが、前者の場合は、絶対と言ってよいほど、そのような欠陥は出ません。

「学校」という漢字を習ってからも、やはり「がっこう」と書くのは、初めに「がっこう」と書く習慣がついてしまっているからです。つい「がっこう」と書いてしまうのは当然の結果でしょう。

ところが、最初から「学校」と学んだ子どもたちは、たとえ書く能力が不十分でも、「がっこう」とは決して書きません。手本にする字を捜し出してそれを見ながら「学校」と書きます。ですから、書くことによって書く力をさらに伸ばしていきますが、先に「がっこう」と習った子どもたちは、漢字を使いませんから、一時的には練習で書けるようになった漢字でも忘れてしまいます。

「木車が木た」というような漢字の使い方をする欠陥は、最初から「汽車が来た」と学んでおれば起こらないで済むものです。

初めに「きしゃがきた」「つみき」などと、かな書きで教えこみ、あとになって「つみ木」が出てきます。すると子どもにとっては、き＝木となるでしょう。そこで、「きしゃ」が「木しゃ」になるのは当然なのです。これでは学習する子どももかわいそうですし、教える先生もつらいわけです。

（四）自然に覚え自然に使えるように

言葉や文字の学習は、知識の段階に止まっていたのでは〝ほんもの〟ではありません。わたしどもの英語のように、日本語で考えたことを、英語に直して話すようでは〝ほんもの〟ではないのです。ひとりでに口をついて出てくるようでなければなりません。

ですから、〝テストすれば書けるが、作文には使えない〟ようでは、ほんとうの漢字力とは言えないわけです。使おうと思って使うのではなく、〝ひとりでに使う〟のでなければなりません。

そのためにはまず、〝最初はかなで、漢字はあとで〟というやり方は絶対にやめなくてはなりません。

つぎに、〝ひとりでに覚えられる〟幼児期に学ばせることが是非必要です。学ぼうとして学んだものは、よほど反復練習しても、使おうと意識して使わなければ使えませんが、ひとりでに覚えたものは、よく身についていて、ひとりでに使えるものだからです。

わたしたちは、日本語を使う場合、文法など全く考えないで使いますが、それでいてちゃんと文法に

適っています。もっとも、はじめに文法があって、それに合わせて日本語ができたのではありませんから、これはあたりまえのことですが、とにかくこのような能力は、①生まれた時から、いつも日本語に接していて、②それがひとりでに身についてしまい、③いつもそれを使っているから自分のものとなったのです。

漢字も、こうした日本語の学習方法で学習すれば、ひとりでに身につきます。ところが、①学校でその漢字が初めて出てきた時だけ練習し、②先生から覚えろと言われて、テストに間に合う程度だけやり、③テストが終わればもうほとんど使わない……これでは漢字能力のつきようがありません。

「宇宙」というのは、中学生になって初めて学習する字です。ところが、この文字は、テレビにはたびたび放送されるし、また新聞にも大きな活字になって出ます。ですから、幼児でもいつかひとりでに覚えてしまっています。

ある幼稚園で調べてもらったところ、かなりの子が読めるということでした。小学生など調べるまでもないでしょう。特に学校で教えなくても、このように、見聞きしていれば、いつともなく覚えてしまうものです。

だから、家庭や学校で、もっと計画的に、漢字が子どもの目に触れるように配慮するならば、特に学習させなくても、子どもたちは、きわめて容易に漢字を覚えるはずです。

（五）長期にわたってくり返し練習

先に述べたように、学校では、初めて出てきたところでその漢字を学習させるだけで、あとの反復練習というものが全くありません。それでもうわかった、というわけでしょうが、これでは、そういう漢字があるという、きわめてあいまいな単なる知識に止まって、〝使える〟能力にまでいくはずがありません。

初めて出てきたところで、どんなに練習してみても、まだ、それを使うところまでいけないことは、だれでも、他のことで経験しているはずです。

漢字力も、運動能力を養うのと同じように、やはり長期にわたって、くり返し練習しなければ、ほんとうの能力にはなりません。初めて出てきたところで、朝から晩まで毎日練習を一週間くらい続けたとしても、それで終わっては確実に身につきません。

まして、テストのための一夜漬けは、永続的な能力を養うことにはなりませんから、学校でさせるべきものでは絶対にないのです。ところが、現実には、この避けねばならないことが一般に行なわれ、テストが済めば、先生も生徒もやれやれと言った顔です。大きなまちがいと言わねばなりません。

その時だけ、一時的にできるようになっても、それだけでは、真の意味で将来のためには何にもならないのですから、そういうむだを止めて、たとえその時にはできなくても、いつかはできるようにしてやる――それが身について、それが使えるように育ててやるのが、〝教育〟というものでしょう。

漢字の学習は、算数や理科や社会科の学習とは、本質的に違ったものです。算数や理科などの学習は、理解するまでが問題ですが、漢字の学習は、それ以後の方が問題なのです。

わたしはかつて軍隊で射撃が得意でした。〝射撃もっさり〟という言葉があって、〝射撃はのろまな人間がうまい〟という意味ですが、とにかく、射撃練習の時がわたしは一番心が安まりました。

射撃は反復練習によってだれでも上達しますが、やはり一応の基礎知識がなくてはだめです。わたしのころは古い山型の照準でしたが、これがどういう位置になった時、引き金を引くか、から始まって、銃の持ち方、銃把の握り方、引き金の引き方、太陽がどちらかにあるか、天候気象の影響等々、理解し記憶しておかなければならないことがたくさんあります。

これらの理解、記憶は、実際体験を重ねていって初めてできるものですが、理解し記憶してからの反復練習がそれ以上に大切なのです。〝一応やってみて理解できた、では次に進もう〟というのは、算数や理科や社会料の学習方法です。〝一応やってみて理解できた、さあ、これからが本番だ〟というのが射撃の練習です。そして、漢字学習はこの射撃の練習と同類です。そして、学校の漢字数育は、この〝本番〟が欠けているのです。これが〝ぼんもの〟にならない理由です。

3　幼児と日本の昔話

早く自分で読むようにさせたい

「現代っ子の心はわからない」と言って嘆く親の多いこのごろです。しかし、現代っ子の心は、今の世の親の心の反映です。

今の世の親たちの物の考え方、日常の行動が、すべて現代っ子の心や行ないを育てたのです。今の子

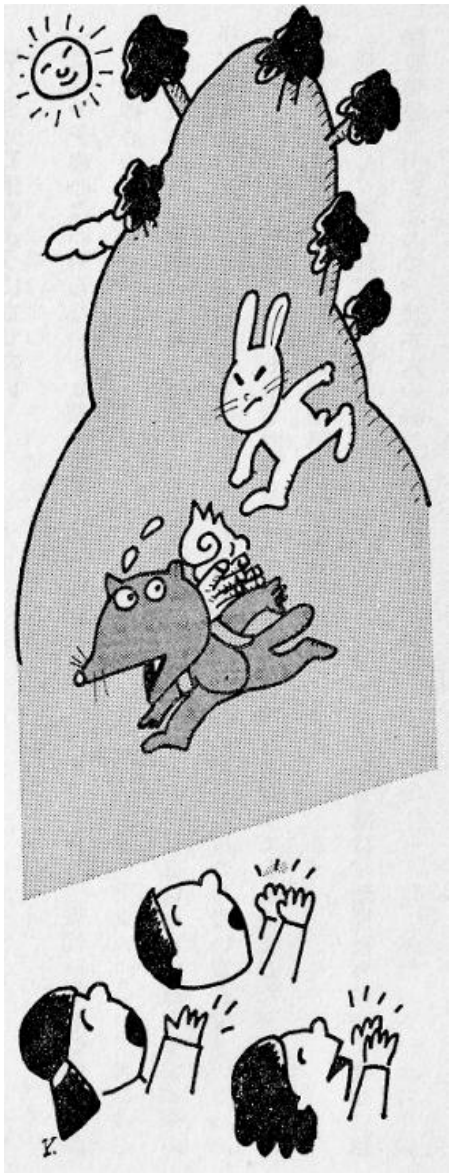
どもの心の中にどんなに悪いものがあるとしても、それは親の負わねばならない責任です。

戦後、わたしたちは、わたしたちの心を育ててくれた古い物語を捨ててしまいました。それで、今の子どもは、愛や正義を貫き通す勇気を知らないのだと思います。

花咲爺さん、桃太郎、舌切雀、カチカチ山、猿蟹合戦、これらの昔話は、幼児たちの心を楽しい想像の世界に引き込んで、日本人の心を育てたのです。

わたしは、小学校の一年生に、毎日一つずつ話をしてやったことがあります。あとで、どの話がおもしろかったかを調べました。わたしはそれまで、日本の昔話はどろくさいと思われ、西洋の童話の方がずっと人気があると思っていました。ところが、実際にはその反対で、いちばん人気があったのは、意外にもカチカチ山でした。

たしかに、「ここはね、カチカチ山と言って、カチカチ音がするんだよ」と話しだすと、子どもたちは、ほかの話のときとはくらべものにはならないほどおもしろそうに、ニコニコしながら聞き入りました。カチカチという音がくり返されることも、愉快だったのでしょう。それにやさしい兎が、いたずら狸を、くり返しやっつけるのが子どもの正義感を刺激し、子どもたちは痛快でたまらなかったのでしょう。



日本の昔話は、やはり、日本人の心を育ててきた貴重な文化遺産なのです。子どもたちの心に、愛と勇気をしみこませる昔話を、ただ聞かせるだけでなく、早くから自分の力で読ませ、楽しませることによって、子どもたちを育ててやりたいと思います。

人生最高の楽しみを与える

わたしは、このごろ、映画を観にいく暇がありませんし、あっても、書物を読む方がずっと楽しいので、結局観ないことになります。

しかし、若いころはよく観ました。特に、感激して読んだ文学作品が映画化された場合には、期待して観に行ったものです。が、ほとんどのものに幻滅を感じたように思います。

映画には映画だけのもつ良さがあるのでしょうが、それぞれの人が心に描くものの美しさを、現実に表現することはまず不可能といえましょう。どんな名優が、どんな名演技を見せてくれても、やはり心が描く美しさにかなうものではないようです。

ことにわたしは、小学校にはいる前から、本を読むのが好きでした。絵本よりも、絵のない物語の方が好きでした。これは、幼い時に母親の物語を聞いて育ったためだと思います。無限に想像をくり広げながら聞く楽しさ、それが物語を読む楽しさにつながったのだと思います。

そして、読み終わったあとも、その物語の世界に没入し、物語の中をさまよう楽しさを味わったものでした。

幼年倶楽部という雑誌が創刊されたのは、わたしの就学前だったと思いますが、不思議なことに、創刊号にあった〝一番楽しいお正月〟から始まって、二十六番目の〝幼年倶楽部が日本一〟に終わる〝しり取り〟など、いまでもすらすらと口を突いて出ます。

幼い時にくり返し自分で読んだものは、それほど強く頭に焼きついてしまうのです。ですから、幼いうちに読書力を育てて、心の糧となる書物を、心の欲するままに読ませてやりたいといつも思います。

〝情操教育の季節〟への備え

大脳生理学の立場から言えば、情操教育に適した時期は十歳ごろから以後だとされています。数学の岡潔先生が、その著『風蘭』や『月影』（いずれも講談社刊）で、この時期を〝情操教育の季節〟と呼び、大脳生理学の時実利次先生は、この岡先生の命名を「いみじき表現だ」と評していらっしゃいます。

この時期に、書物を通して、人の心の美しさに触れさせ、これを理解させることが、何よりも重要な〝情操教育〟〝道徳教育〟であると思われます。

子どもがひとり書物を開き、これに相対する時、書物は親しく子どもに語りかけ、目に見えない栄養

分によって子どもの心を育ててくれるのです。

ですから、ほんとうの情操教育が〝情操教育の季節〟に自然に行なわれる準備としても、その季節以前、つまり幼児期に、読書力の基礎を養っておくことが、その子の一生のために、何にもまして大切になってきます。

書物のことを〝本〟とは、なんという適切な呼び方だろうと思います。人間を木にたとえ、書物をその根にたとえ、〝本〟と呼んだのでしょう。人間は根である書物により成長できるわけです。書物がわたしたちにとって真に〝本〟であるためには、それを読む力がなければなりません。その意味では、人間が人間であるためには、読書力がなければならない、と言えます。

したがって、読書力の基礎である漢字力の育成は、その重要性から言っても、またその本質から言っても、何よりも優先しなければならないと言うことができます。簡単に「漢字よりも先に教えなければならないことがある」などと言って済ませるべきものではありません。

第４章　幼児の学習過程

Ⅰ　幼児と言葉

赤ちゃんの前だから気をつけよう

〝言葉を、数多く、正確に知っていることが、他のどんな特性よりも成功の原因である〟ことが、アメリカで実証されたことは、前に述べました。この言葉の教育は、家庭で、生まれた時からすぐに始められます。

赤ちゃんは、生まれると間もなく、人の声を耳にし、それを聞くことによって聴力を育てつつ、聞いた声を大脳に一つ一つ録音しています。それが、やがて赤ちゃんの発する言葉の基礎になるのです。

人間の頭脳は、テープレコーダーのように耳からはいる声を録音し、そのくり返しの多いものから、これを再生装置に移し、話す能力に換えていくもののように思われます。

鈴本鎮一先生は、「音感は生まれつきのものではなくて育てるものだ。だから、赤ちゃんの時から、

できるだけ最高の音楽、最高の演奏を聞かせることが大切だ」とおっしゃっています。言葉の教育についても、全くこれと同じように考えなければなりません。

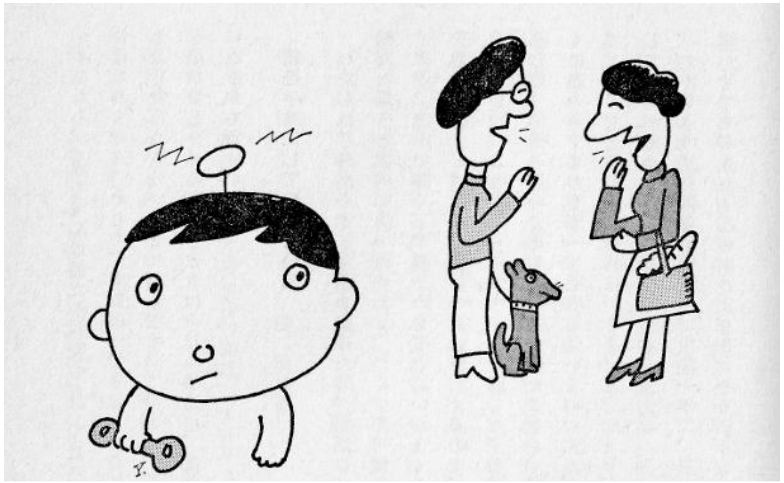
わたしの知人に、三歳のお子さんのある方がいます。最近にわかにお話が活発になってきて、盛んに両親とお話をするようになったそうですが、その中に、ぽつんぽつんといなかの言葉やアクセントが出てくるのだそうです。

現在、その知人の家には標準語以外の発音をする人はいないので不思議のようですが、実は、このお子さんは、生後二年ほど、お母さんの実家のおばあさんのそばで育ったのです。つまり、ものも言えないし、歩くこともできないころに録音しておいた田舎訛りを、おしゃべりができるようになった今、再生しているわけです。そう考えるよりほかに、その理由が考えられないのです。

そうしてみると、赤ん坊だからなにをしても、なにを言ってもわからないというわたしたちの考え方は、きわめて危険と言わなければなりません。父親と母親とのいさかいも、赤ちゃんは、ちゃんと録音してしまうからです。

すなわち、〝赤ちゃんの前だから安心だ〟ではなくて、〝赤ちゃんの前だから気をつけよう〟でなければなりません。そして、家族は、できるだけなごやかに暮らし、きれいな言葉、美しい声で会話をしなければならないことになります。

早口でしゃべる親の子どもはやはり早口に、乱暴な大声でしゃべる親の子どもはやはり乱暴な大声になりがちです。



親を手本にして育っている

わたしは、外から家に電話を掛けた時、電訪口に出て答えているのが、家内だと思うと娘だったり、娘だと思うと家内であったりして、つくづく、親子は似ているものだなあ、と感心しています。

普段、肉声で聞くと、親子の音質の違いがよくわかって、決してまちがえることはないのですが、受話器を通すと、微

妙な音質の違いが消えるので、双方が全く同じものに受け取れてしまうのです。

わたしは、この電話でのまちがいを通じて、普段、親子の違いを聞き分けていたのは、音質よりも、話し方、抑揚の違いであると思っていたことが、誤りであったことを知りました。このように、子どもは親の示すものをすべて吸収しているのですから、子どもの言葉づかいや話し方が悪いからと言って、子どもを責めるわけにはいきません。つまり、子どもの言葉づかいや話し方が悪いのは、親の示した手本が悪かったためなのです。

アメリカの幼児教育研究所で、生後一年二、三か月の赤ちゃんを選んで、毎日十五分くらい、話を聞かせてやる赤ちゃんのグループと、そういうことをしないグループとを作り、約半年間の結果を調査したところ、毎日定期的に話を聞かせていたグループの赤ちゃんの方が、知能が著しく伸びていた、ということがわかりました。

言葉というものが、いかに幼児の頭脳に良い刺激を与え、知能を発達させるか、ということが、この実験でよくわかります。

ですから、まだ言葉を聞き取る能力などないと思われるような赤ちゃんに、しきりに話しかけているお母さんをよく見かけますが、これは大切な教育になっているわけです。この場合、赤ちゃんは返事ができないだけで、後日のためにちゃんとそれを録音しているのですから、お母さんは、できるだけ心をこめて、美しく、優しく、語りかけることが大切です。

おむつを取り換える時にも、ぶつぶつ小言をいったり、なにか怒ったように黙ってしないで、「花子ちゃん、いい子ね」と呼びかけたり、「花子ちゃん、きれいきれいしましょうね」と話しかける。これが子どもを育てる〝言葉の教育〟です。

〝学ぶ〟は〝まねる〟、〝習う〟は〝慣れる〟

〝まなぶ（学ぶ）〟という言葉は、昔は〝まねぶ〟と言いました。それは、〝まね（真似）る〟と同じ意味の言葉です。

幼児は、見るもの聞くもの、すべてを模倣し、模倣することによって、経験を身につけ、これを能力化していきます。そして、言葉を話す能力は、二歳から三歳にかけて著しく伸びますが、この時期の幼児は、人の話す言葉を実に無造作にまねて、それを巧みに使います。〝まね〟がいつの間にか〝ほんも

の〟になっています。まさに、〝学ぶ〟とは〝まねる〟ことです。

ですから、教育学者が〝模倣期〟と名づけているこの時期の言語環境の良し悪しは、その子の言語能力を決定します。したがって、テレビやラジオから流れる音も、幼児たちはすっかり吸収しているのですから、聞かせたほうがいいのか、聞かせないほうがいいのか、聞かせるとしたら、どんな番組にスイッチを入れるか、というむずかしい問題も当然出てきます。

学習の〝学〟が〝まねる〟なら、〝習（なら）う〟は〝慣（な）れる〟ことです。〝慣れる〟の古い形は〝慣（な）る〟で、〝ならう〟はその変化したものです。

物事をくり返しくり返し、聞いたり、見たり、したりして慣れるのが、〝なら（習）う〟ことです。ですから、〝学習〟とは、まずお手本の〝まね〟をして、そのまねたことを反復して〝慣れる〟ことです。〝まねる〟こととそれを〝くり返す〟こととで、子どもの能力は育つのです。

しかも、幼児は同じことの〝くり返し〟が大好きです。おとなにはばからしく思える〝くり返し〟が、幼児にはおもしろくてたまらないのです。この性質があるために、幼児は、何でも楽しんで身につけることができるのです。

物語でも、同じ物語を何回でも聞きたがります。同じ話では飽きるだろうなどと考えるのは、おとなの誤った思いやりです。そんな誤った思いやりから、次々と新しい物語をしてやったのでは、言葉が身につかず、しかも、集中力のない、飽きっぽい性質の子どもにしてしまいます。

急速に物が豊かになった現在では、いわゆる愛情過多から、おもちゃなども次々と新しい物を与え過ぎる傾向があります。その結果、〝くり返しを好む〟という、発育上欠くことのできない重大な性格をこわしています。幼児は、くり返しが好きな模倣期には、能力が伸びますが、くり返しをばからしく思うようになりますと、途端に伸びが衰えてきます。時期がきて、くり返しのおもしろさを感じなくなるのは自然ですが、親の誤った愛情から、どこまで伸びるか測り知れない幼児の能力を抑えてしまうことは非常に残念です。

同じことは同じではない

子どもがいつまでも同じことをして楽しんでいると、「いつまでそんなことをしていれば気が済むの」と、軽蔑するような、非難するような言葉を投げつける親があります。

こういう親の言葉からも、飽きっぽい性質が子どもの中に作られていきます。親は〝同じこと〟と言いますが、実は外見が同じに見えるだけで、内容は決して〝同じではない〟のです。

同じ話を何度聞いても、いや、くり返し聞くたびに、おもしろさの度合いを増しているのです。同じ本を読む場合にも、二度目には二度目の、三度目には三度目の新しい感動と理解があるのです。

幼児が作っては壊し、作っては壊ししているのは、その間に、対象物のいろいろな反応を確かめているのです。何回くり返しても同じ結果が出る。これも幼児にとって驚異であり、発見であります。そしてそこに一つの原理をつかむ。つまり、幼児はいろいろな物事の性質を究める実験をしているのです。

幼児の伸びていく生命のエネルギーが、この大変な実験にいどんでいるのです。そして、自分もかつてそのようにして現在のおとなになっているのだということを、わたしたちは忘れがちです。しかし、世の大科学者というのは、実は、この幼児の心を失わなかった人でした。それを長く保ち続けて、くり返しに耐えられる人だけが、大科学者になりえたのです。

ですから、次々と変わった物語を聞かせたり、新しいおもちゃを与えたりすることに努力し、同じことのくり返しに対してまゆをしかめたり禁止したりする態度は、「しっかりした人になってくれ」と願いながら、その反対の人間に育てているのだと言えましょう。

毎日、喜んで聞く同じお話を、子どもがいやと言うまでは、親もまた心をこめてくり返してやりましょう。いやいやながらするのでは、いかにくり返しが好きな子どもでも、すぐに嫌うようになるでしょう。それは、将来への基礎づくりをしている子どもの無意識の努力を、殺してしまうことになります。

子どもは、その全身全霊を傾け、目を輝かせてわたしどものお話を聞きます。わたしどもおとなにとって、これほど尊い聞き手がこの世にあるでしょうか。話し方に上手下手はないと思います。心をこめて、愛情をこめて話しさえすれば、子どもは喜んで聞いてくれます。下手なら下手で、話し方の練習をさせてもらうつもりで話してやりたいものです。

なお、こうして同じ話をくり返して聞くことによって、幼児はおのずから日本語の構造というものを体得します。ですから、読んで聞かせるにも、内容、表現とも、できるだけしっかりとした文章のものを選ぶことが望ましいのは、言うまでもありません。

2　幼児と物事

空が赤いから犬が殺される

幼児は、見るもの聞くものにつけて、「これなあに」「あの人だあれ」「ここどこ」と質問を連発します。そしてこの質問の答えによって、知識を身につけていくのですから、もちろん、正しくていねいに答えてやると同時に、質問しやすいような雰囲気作りをすることが大切です。

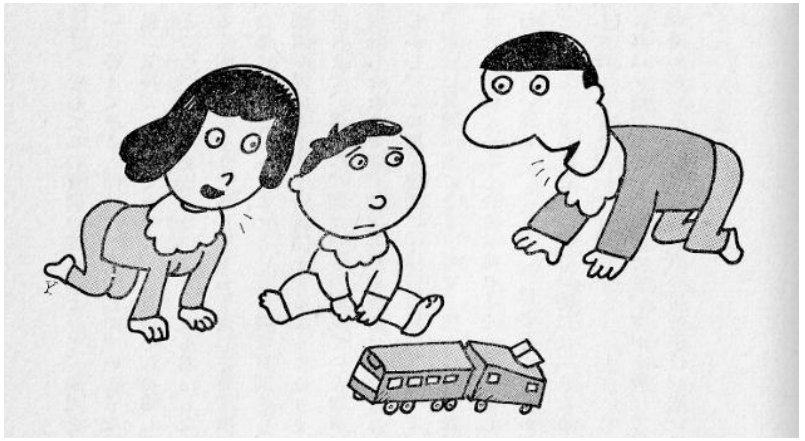
親が気持よく答えてやると、幼児はそれが嬉しくてますます質問して知識を増していきます。

ところが、質問をうるさがると、だんだんしなくなり、知識の増大が止まります。忙しい時でも、明るく応答してやり、答えをもらう楽しさを、満喫させてやることです。

「なあに」「だれ」「どこ」という単純な質問から、やがて「どうして」「なぜ」というように、物事の原因や理由を追求する質問をするようになります。

それまで、単純に、別々のものと見ていた物事に対して、これを関係づけ、結びつけて考えるように成長したためです。幼児の思考能力は、こうなりますと著しく向上します。

親はつねに正確な言葉で



幼児は、サシスセソをタチツテトまたはチャチチュチェチョに、ラリルレロをダジヅデドに発音します。たとえば、「お父さん」は「おとーたん」、「ラジオ」は「ダジオ」と発音します。これは発声器官が未発達のために起こるもので、そのように発音したくてしているのではありません。ですから、手本になる親が、子どもの発音に合わせて「おとーたんと遊ぼうね」などと言うのは全くの見当ちがいですし、子どもの発声器官の発達を遅らせることになります。

総じて幼児語は使わないことです。「おくちゅ」でなく「くつ」、「でんちゃ」でなく「でんしゃ」というふうに、すべて正しい言葉で話しかけ、幼児の録音装置に、あとで訂正を必要とするような吹きこみはしないことです。

しかし、この種の質問は、以前の質問と違って、大変に答えにくいものがあり、説明すればするほど、新しい質問が出てきますので、往々にして親が受け切れなくなります。でも、決してでたらめに答えたり、はぐらかしたりすることなく、応答してやりたいものです。

わからない時には、「さあ、お母さんにもわからないわ。お父さんがお帰りになったら、一緒に聞いてみましょうね」とか、忙しい時には「またあとでね」とか、とにかく、まじめに応答する態度を示してほしい、と思います。

これはソ連の子どもの話です。空が夕焼けで赤かった時、狂犬が射殺される事件がありました。その時から、それを見た二歳半の男の子は、赤い夕焼けを見るたびに、自信たっぷりに言ったそうです。

「また、犬が殺されるよ」

二つの現象（空が赤い、犬が殺される）の間に因果関係を見付けようとするこの科学的な思考の芽生えを、尊重してやることが大切なのです。

この場合、因果関係はないのですけれども、子どもなりに因果関係をつけ、つけ得たことに満足しています。此れを間違いだと決めつけてはいけないのです。

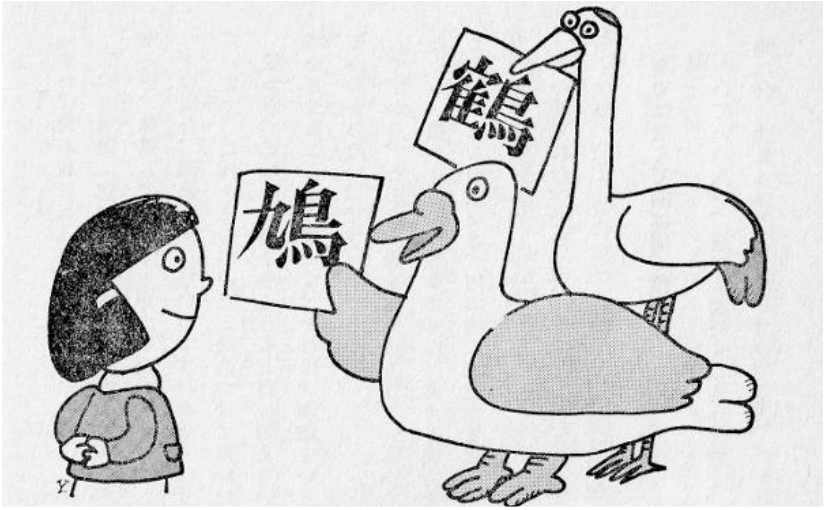
頭から、正しい知識を与えることだけ考えないで、誤っていてもよいから幼児の能力に応じた思考をさせることが大事です。それに、知識というものは、今は正しいとされていても、いつ誤りになるかわからないのです。

ですから、そんな知識を詰め込もうとして、「その考えは誤っている。ほんとはこうだ」と言うことくらい愚かな行為はありません。考える能力を養うことが大切なのであって、幼児の理解を越えるような単なる知識など、何の役にも立ちません。其れは、どんなに詰め込んだところで、幼児の思考力の発達を妨げるだけです。

この時期には、それまで「……する」「……だ」という単文しか言えなかったものが、「……だから……する」「……なので……だ」という複文が使えるようになります。

鳥ではなくて鳩は鳩、鶴は鶴

たいていの人が、鳩でも鶴でも「鳥」と教え、金魚でも鯉でも「魚」と教えます。しかし、鳩は鳩、鶴は鶴と教えるべきだと思います。「鳥」という言葉は、鳩や鶴が分かった後にそれを統合する言葉と



して教えるべきです。そうでないと、「鳥」や「魚」という言葉を、正しく理解させる ことができないからです。

一般に幼児は、実在に即した具象的な言葉をそのまま受け入れることができますが、実在でない抽象的な言葉は、具象的な実在に結びつけない限り、理解することができません。たとえば、「お母さん」という言葉は、最初は実在である自分の母親を表す言葉としてしか理解できません。「友子さんのお母さん」と言えば、「それはお母さんじゃない、お母さんはこれ」と言って、自分の母親を指さします。

そういう幼児ですから、抽象的な「鳥」よりも、実在である「鳩」「鶴」の方が理解し易いのです。

漢字でも、矢張り、「鳩」「鶴」というような字から教えると容易に覚えます。これらの漢字は、三歳以後なら、どんな字でも必ず理解して読むようになります。学習の難易は、字画には関係ありません。

絵本で鳩や鶴の絵の処に、これらの漢字を書きいれておけば、子どもたちはすぐ覚えてしまいます。

「鳥」というような字は、その共通点に気づいて、「鳩と鶴には同じものがあるね」と言うようになった時に、①それがトリという字であること、②トリとは、鳩や鶴のように、翼があり、羽毛があり、足が二本の動物の総称であること、などを教えてやります。

数を急いで教えることはない

いま述べたように、抽象的な言葉や文字というものは、幼児の思考力を越えているために理解しにくく、なかなか関心を持ちません。したがって、親の方から一方的に教えても、それに興味が持てないので、無駄な努力に終わります。数の場合もそうです。お菓子を配る時などを機会に教えるとよいでしょう。もっとも、教えるというよりも、使って見せることです。実際に使って見せれば、だんだんと理解していきます。

〝教える〟ということは、いろいろな物の実体がわかってそのうち「これは同じ仲間のもの、これは

別の仲間のもの」というように、分類したり、同類を集めたりすることができて、初めてできることですから、一般に考えるほどやさしいことではありません。

世界的な数学者である岡潔先生は、「数は急いで教える必要はない。それよりも、幼児の接する実在や、それを表す言葉を、はっきり認識させることの方が先だ」と、おっしゃっています。それができなくては、数が理解できるはずがないからでしょう。

幼児の理解は、具象的なものから、具象物を通じて抽象する能力が育ち、自然と抽象的な言葉や文字の理解へと進んでいくものです。説明してやって、それでわかるというものではありません。

文字の入門は漢字から

〝易から難へ〟ということは教育の当然の手順です。ですから、やさしい漢字を先に学習し、覚えにくいかなを後にするのは、その意味で当然のことと言えます。

しかし、それ以上に大切なことは「漢字を先に学ばせる」ことの価値です。これはとても大切なことです。

かなを先に覚え、かな書きの本から読み始めた子供と、漢字を先に覚え、漢字かな混じり文から読み始めた子供とでは、読書力の育ち方が全く違うからです。

漢字かな混じり文は、すでに述べましたように、実に読みやすく、意味がわかりやすいものですから、ここからはいった子どもは、読書を楽しんでします。だから、読書力がたちまち向上して、すぐに大人にも及ばないほどになります。これに対して、かなばかりの文は、読みにくく、ゆっくり読んでも意味が取りにくいものですから、読書が少しも楽しいものになりません。楽しくない読書は、読む気がしないので、読書力がつかない、というわけです。

「きのうわたくしはとうきょうえきへおじさんのみおくりにいきました」――こんな簡単な文章でも、子どもに読ませて、「いつ、だれが、どこへ、何しに行ったか」を尋ねてみますと、さっぱり答えられません。

だから、学校の国語学習では、読解指導と称して、「これはいつのお話ですか」「誰のお話ですか」「どこへ行きましたか」などと一々確かめています。また、こんな質問によって、国語の力をテストしているのです。

「昨日私は東京駅へ伯父さんの見送りに行きました」という表記になりますと、すらすら読めて、読むなり内容がつかめてしまいます。

「き、の、う、わ、た、く、し、は……」という読み方では、終わりまで読んでも意味がわかるはずがありません。だから、第二章の3で述べましたが、算数の文章題も解けないのだということになるのです。

日本の文章は、一つ一つの言葉が、最後の言葉と結びついていて、隣同士は関係ありません。例えば、「昨日行きました」「私は行きました」「東京駅へ行きました」……というように、次々に積み重ねられた言葉は、お互いには無関係で、最後の「行きました」に結びついているのです。

ですから、一字一字はもちろんのこと、一語一語に止まっていたのでは、文意がわかりません。早く一息に文末まで読み通さないと、文の組立てがはっきりとわからないのです。

かなばかりの文がわかりにくいのは、こういう理由があるからです。反対に、漢字かな混じり文だと一息に文末まで読み通せるので、文意がはっきりわかるのです。

ですから、幼児には最初に漢字かな混じり文を与えて、読むことの楽しさを知らせなければなりません。

かなばかりの文は幼児にはわからない

「うちの子は本を少しも読みたがらない」と言って多くのお母さんが嘆きます。調べてみると、その子どもたちが与えられているのは、たいてい、内容は豊かですが、かなばかりの本です。

どなたもご存知でしょうが、かな文字ばかり並んだ文章は、おとなにさえ、わかりにくく、めんどうなものです。まして抽象的な意味がわかりにくいかなが幼少の子どもたちに喜ばれるはずがないのです。事実、わたしどもがやっている漢字による教育を受けた子どもたちは、すでに小学一年生にして、かなばかりの本は読みにくくて、読む気になれない、と言っております。

これは、読書人を増大していかなければならないはずの出版社が、みずから減退させる大役を買っているようなものです。そして、そのことに気づいていても、第二章の3に述べたように、編集の人は「どんなに良い本でも、買ってもらえなければ、作るわけにいかない」のですから、買う方にも大いに責任があることになります。つまり、日本中のお母さん方が、「かな書きの本などいらない。みんな漢字か

な混じり文にしてほしい。そうでなければ買わない」というところまでいかなければならないでしょう。

ところで、漢字かな混じり文なら楽しく読める、と言っても、それは漢字が読める上での話です。漢字が読めないことには、かなばかりの本よりも、手がつけられません。つまり、お母さんの読むお話を聞いて育った幼児が、自分でそのお話を読んでみたい、という気持ちを起こす以前に、漢字を読む力を養っておくことがどうしても必要です。

そこで次に、漢字の与え方を考えましょう。

3　漢字の与え方

絵本や文字板の利用

漢字を与える材料として、まず絵本があります。絵のところに、その絵に当たる語を漢字で書いておくという方法があります。

動物絵本や、乗り物絵本などがよいと思います。「犬・猫・馬・牛・猿・熊・象……」「汽車・電車・自動車・自転車・三輪車・飛行機・汽船……」というような漢字が考えられます。

子どもが漢字を指して「これなあに」と尋ねてくれれば、教えるのには最も理想的です。しかし、押し付けにならないように、「この猫の絵のそばにある字はね、〝ねこ〟と読む字なのよ」と軽く、お話をするようなつもりで、つけ加える程度でも十分です。

そうすれば、子どもの方から、「じゃあ、犬のそばのこの字は、〝いぬ〟と読むのね」というように、むしろ自分から発見していくものです。ご存じのように、幼児が、かなを覚えるためのおもちゃとして、〝文字板〟というものがあります。犬の絵が表にあると、その裏に〝い〟というかな文字があるものです。このかなの部分に、紙を貼りつけて、〝犬〟という漢字を書き入れるのです。

絵本にせよ、文字板にせよ、長い間に、ひとりでに覚えるのが理想です。「早く覚えたものは早く忘れやすい」という言葉を思い出して、読めるようになるのを気長に待つことです。

「まだ読めないの」などということは、おとなが心の中で思うことも厳禁です。わたしどもの経験では、そういう気持があっては、この教育は絶対に成功しません。しかも、教えるということにせっかちな親が多いものです。この教育熱心で誤りがちな親の態度が、どんなに子どもの正常な成長を妨げてい



ることか。この漢字による教育は、正しく実施された時には、すばらしい効果がありますが、反対に幼児の口をねじあけて、食べものを詰め込むような誤った方法をとるならば、せっかくの苦心も逆効果になってしまいます。

子どもは常に背のびし、おとなになりたがっているものです。おとなのようにしたいのです。ですから、子どもが新しく漢字を読んだ時には、「お母さんと同じように読めるのね」と言って褒めてやることです。それは、読むことに対する子どもの興味を増し、読字力の増大に一層輪をかけます。

カードを使って漢字遊び

幼児の教育は、すべて〝遊び〟を通して行なわれるものです。漢字教育もまた、それ自身が遊びでなければ成功しません。わたしが幼い時の記憶では、かなを全部覚えたのは〝いろはかるた〟でした。かるた遊びをしているうちに、絵と字とが結びついて、いつともなく字形まで覚えてしまったものです。

現在では、〝漢字かるた〟や〝漢字カード〟などが出ていて、すでに多くの家庭で利用されています。

〝漢字カード〟は、一般的に、口・目・耳などの基本漢字、先生・幼稚園などの熟語、歩く・遊ぶなどの動詞、重い・長いなどの形容詞がそれぞれ数十語、その他全部で数百枚一組になっています。表が絵、裏が漢字のカードもあり、いろいろなゲームをして遊ぶうちに、いつか名詞・形容詞等を漢字で覚えてしまうので、文章を読むのにすぐに役立つという効果があります。

これらの教材は、いまのところ、幼稚園を通じて販売されている場合が多いかもしれませんが、ちょっと工夫すれば、手作りでできますし、お母さんの手作りは、どんなに粗末なものでも、子どもにとっては、なににもまして尊く、楽しいものです。

家の中に漢字で名札貼り

幼稚園でよくやっている遊びに、〝名札貼り〟があります。机・黒板・時計・柱・壁・窓・花瓶……など、実物に一つ一つ名札を貼りつけて、実物と漢字と結びつくように計画しているわけです。

また、教室には、「静かに」、廊下には「走らない」とか「右側を歩く」とか、洗面所には「手を拭く」とか、滑り台には「順序よく」とか、注意を書いた札が貼られています。

こういう幼稚園では、下駄箱の名札は、もちろん、漢字です。かなだとなかなか自分の場所が見つからず、混乱していたものが、漢字に改めたらすぐ見つかるらしく、混乱がなくなってしまった、ということです。

家庭では、名札貼りは来客を驚かして、具合が悪いでしょうが、子ども部屋があれば、これはできます。あるお宅では、お手洗いに、毎日、漢字カードを変えて貼っている、というお話を聞きました。「それほどまでにしなくても」とお考えの方も多いと思いますが、いいこと、役立つことは、工夫して実行してみることが、大切ではないでしょうか。それが成功へのかぎともなるのです。そして、どこまでも必要なことは、親子ともともに楽しむ雰囲気で行なわなければだめだということです。

体験を漢字にして示す

「熱い」という字など、「あつい」と読めただけでは、ほんとにこの字が読めたとは言えません。「暑い」とどう違うかがわからなければ、読めたことになりません。

こういう字の指導は、二本の牛乳瓶に、「熱い」「冷たい」という漢字を書いた紙を貼っておき、それぞれ、熱湯と氷水とを入れておいて、子どもに瓶に触れさせるのです。

子どもは、二つの瓶に触れることにより、熱いことの体験と、冷たいことの体験をし、その体験をそれぞれの漢字と結びつけるようになるでしょう。

こうして、「熱い」という漢字を見れば、そこに熱湯が入れてなくても、触れて熱かった時の経験が思い出され、その感触がよみがえるようになり、ここではじめて「熱い」という漢字がほんとうに読めたことになります。

長い・短い・重い・軽い・太い・細い・広い・狭い・大きい・小さい……こういう漢字も、同様にして、単に発音できるようにするだけではなくて、体得させなければなりません。

マッチ箱を二つ用意して、一つには鉛などの重い物を入れて、これに「重い」と書いておき、もう一

つには綿でも入れて、「軽い」と書いておく。「長い」「短い」は、使い古しの二本の割箸を利用してもよいでしょう。この場合は、漢字を書いたカードを、糸で箸に結びつけておくのです。

「太い」「細い」「大きい」「小さい」……も同じことです。もうこれ以上説明することはないでしょう。その他、「丸い」「四角」「三角」「白」「黒」……なども、このようにして教えます。

４　読みと書きの教え方

その場に応じた読み方だけを

よく尋ねられることですが、「音訓はどう指導するか」ということです。一つの漢字にいくつもの音訓がある。これを皆教えるのかどうか、ということです。

わたしの漢字教育では、「一つの漢字にいくつもの音訓（つまり、読み方）がある」とは考えないのです。言葉を基にして、その言葉を表わす文字としての漢字を考えるのです。

具体的に言いましょう。〝うし〟という言葉に対して〝牛〟という漢字を教えるのです。だから、〝牛〟という漢字は〝うし〟と読めればよいので、他のことは考える必要はない、という考えです。〝ぎゅうにゅう〟という言葉に対して〝牛乳〟という漢字を教えます。だから、この字を見れば〝ぎゅうにゅう〟と読めればよいのです。牛と牛乳と、どちらを先に教えるか。それは、その実際に即して教えるのですから、〝牛〟が先になることもあれば、〝牛乳〟が先になることもあってよろしいのです。

その実物について、その実物を表わす漢字を教えるのですから、どちらから教えようと、幼児にとっては、大した問題ではないのです。牛のほうが牛乳よりもやさしいように思われがちですが、〝牛〟の実物を見ない幼児にとっては、〝牛〟は〝牛乳〟よりも決してやさしいとは言えません。たびたび言うように、幼児には、目に見えないものを想像することはできませんし、頭に描けないものを表わす字など、幼児は関心を持つことができないのです。

漢字の使命は、それが何を意味するかを人に伝えることにあります。〝牛〟という字を見たら、即座に、おとなならだれでも知っている動物の牛が思い浮かべられれば、それでよろしいのです。極端に言えば、〝うし〟でも、〝ぎゅう〟でも、読み方はどうでもよろしいのです。

この場合、〝牛の乳〟と読む字だという説明をせず、そのものずばり、牛乳という実体に即して〝牛

乳〟と教えて下さい。〝牛〟だけ見たのでは、何の反応も起こらないようでよいのです。〝牛乳〟の〝牛〟が〝うし〟であることを教えるのは、現実の牛（と言っても絵でもよいのです）について、それを表わす〝牛〟という字を覚え、しかも、幼児が「この〝牛〟は〝牛乳〟の上の字と同じではないか」という発見、もしくは疑問を発した時です。

それまでは、〝牛〟と〝牛乳〟とは、関係なく教えるのが、わたしどもの基本的な考え方です。幼児は、牛と牛乳との実際的な関係は知らないのですから、初めからこれを関係づけて教えることは無用であり、無理でもあるのです。



やがて音訓を教える時期がくる

幼児は、牛と牛乳との実際的な関係を知らないように、最初は、文字の上でも、両者の共通点に気づかないでしょう。しかし、必ず、いつかは気づくはずです。両者の共通点に気づいた時が、実在である牛と牛乳との関係を教える時になります。その時「〝ぎゅうにゅう〟が牛の乳であるから、この言葉を表わすのに〝牛〟という字を使って、これを〝ぎゅう〟と読んでいるのだよ」と教えるのです。

つまり、幼児の発見、もしくは疑問を待って教えるべきもので、それなくして、単に音訓の知識を授けて、幼児にその知識が得られたとしても、恐らく実効は少しもないでしょう。

それよりも、幼児に、発見することの喜びを与えることです。これは学問の方法と喜びを与えることに通じるのですが、単に音訓の知識を授けることは、この発見の喜びを幼児から奪ってしまいます。

そればかりではありません。与えられた知識は失われやすいものですが、自ら発見したこと、もしくは疑問に対して教えられた知識は、心に深く刻まれて、なかなか忘れないものです。親は、何でも教えたがりますが、同じ知識でも、授けられたものと、自ら発見したものとでは、その働き、その価値の上に大変な違いがあることを知らなければいけません。

それに、教えてもらうという受け身の学習ばかりしていますと、意欲に欠けた人間に育ってしまう恐れがあります。その意味からも、できる限り、子ども自身に発見させ、発見する喜びを知らせることが、なにごとにも意欲をもち、能力のある人間に育てることに通ずる道なのです。

書きは読みに習熟してから

「漢字を書く指導は、いつ、どのように行なうか」もよく尋ねられる問題です。明治以来、漢字教育は〝読み書き同時〟、並行して学習させることになっています。

しかしわたしは、〝読み書き分離〟〝読みを書きよりも先に学習させる〟という考え方をとっています。

〝読み〟と〝書き〟とは、赤ちゃんの〝はいはい〟と〝あんよ〟との関係に似たところがあります。〝はいはい〟することによって〝あんよ〟の力がついていくことです。つまり、〝読み〟に習熟すれば、字形の認識が自然に深まり、書きの学習に移った場合、〝書き〟の学習が容易になります。ですから、〝書き〟を急がず、まず〝読み〟の学習を十分にせよ」という考えです。

読み書き同時の学習は、はいはいのできない赤ちゃんがあんよさせられるようなもので、字形についての認識がまだできていないのに書かせられるものですから、苦労ばかり多くて、書く力はつきません。いまの学校教育では、読み書きを並行して進め、これを同時に完成させようとしていますが、これはそもそも無理なこと、不可能なことを要求しているのです。しかも、こういう学習を強制していますと、漢字嫌いになって、漢字力は身につかず、果ては勉強嫌いになってしまう恐れがあります。

書きについては、どこの学校でも、書き取り練習というのをやらせています。一ページに同じ字を何回もくり返して書かせていますが、書くのに意欲が出ませんから、なかなか書く力はつきません。それに、この書き取り練習は、その漢字が初めて出てきたところでやるだけで、あとはさっぱりやりません。これではその時は書けるようになっても、しばらくすればすぐ忘れてしまうだけです。

昭和四十四年三月十日、東大名誉教授阿部吉雄博士が、わたしの唱える〝読み書き分離教育〟を国語審議会に提案したところ、これに対する支持と反対とをめぐって白熱的論争が行なわれた、と新聞が報道しました。その後四月二十二日、朝日新聞では「漢字教育、どちらが有効か」という論争を特集し、この読み書き分離論をめぐって、議論が戦わされました。今までだれからも考え出されなかったこの考

え方が、今、学者ばかりでなく、学校の現場においても真剣に検討されております。

表現よりもまず理解を

〝読み〟とは〝理解〟することであり、〝書き〟とは〝表現〟することです。〝表現〟という行為は、十分に〝理解〟し、身についた後に、初めて、それを用いて表現しようという意欲によって起こるものです。

十分に理解できないうちに、それを用いて表現しようという意欲など起こるはずがありません。その意味でも、〝書き〟は〝読み〟の完成の上に始められるべき学習であって、同時に行ない、同時に完成を求めるべきではないことがよくわかると思います。

まして、幼児の生活には、文章を読む生活は考えられますが、〝書く〟生活は考えられません。〝文字表現〟をしなければならない理由がないのです。

わが国では、小学校の一年生から、〝作文〟をやらせていますが、これは背伸びした学習であって、まだ早すぎるように思われます。というのは、西欧諸国では、いずれの国でも作文教育を、三年生、早くて二年生の中ごろ以降に始めていて、その時期においては、日本の学童の作文の方が優れているのですが、小学校の終わりから中学校にかけては、逆に劣ってくる（国立国語研究所調べ）という調査があるからです。

能力を無視した時期尚早の教育は、初めのうちだけ良いように見えても、発育が早く止まり、結局はだめになってしまいます。わが国の作文教育は、明らかにその例だと思います。内容が充実しないうちから、〝表現〟活動をさせても成功するはずはないのです。まして、幼稚園で〝作文〟教育を行なっているところがあると聞いていますが、はなはだ見当ちがいなことで、幼稚園では文字による〝表現〟よりも文字の〝理解〟に重点を置いて、知識を吸収し、内容を充実させる学習に努めるべきだと思います。

たしかに幼児は、わたしたちが驚くような文を書くことがあります。しかし、それは、文章よりも、言葉の表現として受け止めるべきだと思います。

わたしは、当時三つか四つだった長女と、田舎道を山の方に向かって歩いて行きました。その時、「おや、僕（四つ上の兄の言葉をまねて、そういう習慣がついていた）が歩いて行くと、お山が逃げて行くよ。僕は強いんだなあ」と言ったのです。

そう言えば、たしかに、こちらが一歩進めば向こうの山は一歩後退するように見えます。しかし、わたしたちおとなは現象を常識的に頭で見て、感じるがままに見ようとしません。

ですから、わたしたちは時々子どもに教えられます。わたしは、この時、幼い娘に教えられた、と思いました。つまり、幼児の作文に、おとなを驚かすような表現があっても、少しも不思議はありません。しかし、それは、子どもの見方が優れているのであって、作文（文章表現）が優れているのではありません。

幼児期は、文章表現を伸ばす時期ではなくて、その基礎である〝言葉による表現〟を伸ばす時期です。そして、おとな以上にするどい、真実を見る目を、さらに育てるべきだと思います。

つまり、〝文章作文〟ではなくて〝口頭作文〟を育てる時期です。そもそも文章は、言葉を文字で写したものですから、言葉による表現〝口頭作文〟を磨いておけば、文字力が身についた時、それをすぐに〝文章表現力〟に移行させることが自然にできると思います。